OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	占領下「アメリカ村」を生きた人々の経験と記憶 : 占領軍メイドから「戦争花嫁」へ
Author(s)	野田, 朝香
Citation	日本学報. 2023, 42, p. 49-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91309
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

［2021年度　卒業論文❷］

占領下「アメリカ村」を生きた人々の経験と記憶
―― 占領軍メイドから「戦争花嫁」へ――

野田　朝香

要旨

本論文は、明治から昭和初期にかけてカナダへの移民を多く送出した和歌山県三尾村における、占領期の人々の経験と記憶を考察する。先行研究に加え、公文書、新聞、雑誌記事、手記、筆者による聞き取り調査によって、占領軍メイドから「戦争花嫁」となった三尾村の女性の経験を明らかにした。

1章では、三尾村の戦後史をまとめた。移民地カナダではなく、送出側の三尾村を起点に、終戦後の、カナダからの引揚、日本での生活、その後1950年以降、再びカナダに戻るという歴史を整理した。さらに、戦時下の三尾村での経験と帝国内の移動を包括的に論じた。

2章では、カナダからの引揚者を中心に、占領期、占領軍労働に従事した人々の経験を明らかにした。とくに、三尾村の女性が占領軍メイドとして働いていたことから、同時代の「女中」と比較しながら、女性が労働の場において「使用」される家事労働の問題点を指摘した。また、占領期におけるジェンダーの不均衡な構造に着目し、占領軍労働に従事した移民について、「貢献」と「適応」という主体のありかたがみられることを提示した。

3章では、占領軍メイドのなかには、職場で出会った進駐軍兵士と結婚し、渡米した女性がいることを明らかにした。聞き取り調査で語られた女性の経験と記憶を中心に、占領軍労働が出会いの場となったこと、戦前からの移民経験が「戦争花嫁」と密接に関わっていることを示した。また、占領軍メイドと「戦争花嫁」は「忘却」されてきた歴史であり、それぞれが重要な移動として、移民史や三尾村史においても含まれるべきであると指摘した。

三尾村における占領期の占領軍労働と「戦争花嫁」の経験と記憶は、移民史、地域史、占領史、ジェンダー史の視点が折り重なる。多領域をまたがる事象について考察したことで、戦後史が不可視化してきたものを掘り起こした。

目次

はじめに
1章　移民村三尾村の戦後史
　1節　戦時下における強制移動・収容・送還と引揚者―カナダからの流れ
　2節　戦時下から終戦後の三尾村―三尾村での経験
　3節　再渡加―三尾カナダ連絡協会を中心に
2章　移民村三尾村と占領軍メイド
　1節　占領軍労働と移民
　2節　占領軍労働のなかの女性―占領軍メイド
　3節　メイドと「女中」
　4節　「アメリカ文化」を受容する女性へのまなざしの変化―服飾に着目して
3章　移民村三尾村と「戦争花嫁」
　1節　移民村三尾村における婚姻の歴史と「国際結婚」
　2節　三尾村の「戦争花嫁」
　3節　占領がもたらしたジェンダー規範から占領軍メイドと「戦争花嫁」を考える
おわりに
参考文献リスト

はじめに

1888年、三尾村[1]（現和歌山県美浜町三尾地区）出身の工野儀兵衛がカナダに渡航し、サケ漁などに従事した。その後、儀兵衛の呼び寄せを機に、三尾村出身者のカナダ・ブリティッシュコロンビア（BC）州のスティブストンを中心とした地域への移住が始まる。移民送出の背景としては、耕地面積の少なさと人口増加が挙げられる[2]。カナダの文化を郷里の三尾村に持ち帰った移民が、カナダ風の洋館を建てたりしたことから、「アメリカ村」と呼ばれるようになった[3]。昭和初期まで、移民の送出は増加傾向をたどったが、1910年代以降のアメリカ大陸での移民排斥の機運の高まりにより、移民数の増加は鈍化し、アジア・太平洋戦争の勃発後、日系人の強制移動・収容・送還が始まった。

戦後、カナダからの引揚者や復員者の増加、食糧不足などの影響により、村外へ職を探しに出る人もいた。小山［1984］は、1983年に実施した移民経験者への聞き取り調査のなかで、キャンプ堺のあった大阪杉本町で進駐軍の通訳として働いていた三尾出身者がいたと明らかにしている。また、岡本［2008］も、沖縄の進駐軍の通訳を務めた三尾村出身者の語りを引用している。1950年には、「三尾カナダ連絡協会」が設立され、引揚者の再渡加が促進された。

本研究では、敗戦後、占領下にある日本、三尾村で、カナダ移民あるいは三尾在住者がどのような経験をしたのかを明らかにしたい。三尾村の移民史に関する先行研究は、山田［2000］のような移民のエスニシティとアイデンティティについての調査や、戦前の移民「最盛期」[4]に関する研究、さらには2017年以降の地方創生事業を中心とした観光の文脈での研究が中心となっている。三尾の歴史は、和歌山市民図書館移民資料室やNPO法人日ノ岬・アメリカ村を中心に語り継がれているが、戦後、とりわけ占領期は「空白の時代」のようにみえる。 三尾村移民に関する歴史叙述の蓄積は多いが、そこで保存されている歴史と保存されていない歴史は何であるかという疑問が、本研究の出発点である。

福武［1953］の研究は、移民送出地の三尾村の歴史、文化、社会を包括的に明らかにしており、この「空白の時代」に、移民2世の女性の

多くが進駐軍メイドとして働いていたと述べている［福武1953：63-66］。しかし、彼女らがどのような経緯でその職に就いたのか、さらには、職場でどのような経験をしたのかなど、詳細なことは明らかではない。加えて、筆者の聞き取り調査により、占領軍メイドの女性のなかには、進駐軍兵士と結婚し、渡米した人がいることも明らかになった。よって、研究対象は、占領軍メイドなど占領軍労働を経験し、さらに「戦争花嫁」として進駐軍兵士と結婚した三尾村の女性である。

研究方法は、文献調査と聞き取り調査による。移民史、三尾村史、占領史、ジェンダー史に関する先行研究をそれぞれ整理したうえで、公文書や新聞、雑誌を分析対象とする。加えて、三尾カナダ連絡協会初代会長の錦濱光之助の回顧録『思い出の記』（3-4号、1977年）[5]も、戦後の三尾村の状況が詳しく分かる貴重な文書である。カナダからの引揚者が抱えた問題や、引揚者が占領下の日本をどのようにまなざし、経験したかを考察したい。

重要な一次資料として聞き取り調査による記録が挙げられる。森本、森［2018：20］は「写真花嫁」や「戦争花嫁」について、十分な記録が残されていないことを指摘し、オーラル・ヒストリーの果たす役割を強調している。本論文でも、とりわけ女性の経験に焦点を当て、文献資料に残っていない人々の姿を、当時を知る人にインタビューすることで明らかにしたい。聞き取り調査は2020年11月5日～2021年10月25日、三尾村在住者と村外在住者の計12名、計17回行った。複数人同時に聞き取りをしたものもあれば、複数回聞き取りをしたものもある。表1は筆者が行った聞き取り調査の語り手と聞き取り内容の概要をまとめたものである。

表1 三尾村に関する聞き取り調査

名前（敬称略）	実施日（聞き取り場所）	聞き取り内容要旨
中野幸	1回目：2020年11月8日（三尾の自宅）	女性、1950年三尾村生。カナダ移民の祖父の話を中心に、移民をしていた家族に関する話を聞く。占領期の記憶として、ハウスメイドの女性について初めて聞く。
	2回目：2021年2月1日（三尾の自宅）	カナダ移民の家族の話を聞き、移民先での家族の写真を見せてもらう。ハウスメイド5名の話と「戦争花嫁」についても聞く。
	3回目：2021年8月16日（三尾の自宅）	冨久枝（中野の大叔母の子供）を中心に、ハウスメイドに行った女性たちの話を聞く。写真やPXで買った結婚指輪を見せてもらう。
	4回目：2021年10月25日（三尾の自宅）	冨久枝への手紙送付にあたっての確認を行う。また、冨久枝にまつわる話も追加で聞く。

三尾雅信	2021年5月23日 （オンライン）	男性、1970年濱ノ瀬（現在の三尾地区の近隣地区）生。幼少期に三尾地区の父親の実家に引っ越し、三尾小学校卒。NPO法人日ノ岬・アメリカ村で、語り部ジュニア育成に携わっている。
中井公次	2021年5月25日 （三尾の自宅）	男性、1937年三尾村生。小山祐一とは親戚。小学校から日高高校、大学までの学生生活や就職後の話を聞く。
三輪映信、三輪町子、吉田幸子、西浜律子	1回目：2021年5月25日 （光明寺）	三輪映信、男性、1978年三尾生。光明寺現住職。三輪町子、女性、1944年満州生。1975年、三尾の光明寺前住職との結婚を機に、三尾在住。吉田幸子、女性、1932年三尾村生。西浜律子、女性、1935年カナダ生。光明寺の歴史と吉田、西浜両氏の戦前から戦後までの経験を聞く。三尾からメイド行った人たちについても話された。
三輪映信、町子	2回目：2021年9月7日 （光明寺）	カナダ移民の吉田家のアルバムを閲覧。三輪家と吉田家は親戚。吉田トミノと娘の冨久枝、昭子について話を聞く。
吉田幸子	2回目：2021年6月17日 （オンライン、三尾雅信同席）	戦時中、食べ物がなかったことや逢母（三尾村の集落の一つ）の焼夷弾被害のことなどを聞いた。父はアメリカ移民。戦後、芦屋や大阪へ女中奉公に行った。浜寺のハウスメイドの就労経緯について、浜寺公園の世話人と三尾の仲介人（吉田父含む）の存在について証言があった。
	3回目：2021年7月29日 （オンライン、三尾雅信同席）	ハウスメイドと「戦争花嫁」について詳しく聞く。
西浜千鶴子	1回目：2021年6月13日 （オンライン、三尾雅信同席）	女性、1929年カナダ生。大和紡績での学徒動員の経験など、戦時下の話を主に聞いた。
	2回目：2021年6月22日 （オンライン、三尾雅信同席）	戦後、大阪・箕面へ女中奉公に行ったとき、箕面に進駐軍のハウスがたくさんあり、そこで働いていた友達のところへ遊びに行った話を聞く。

小山祐一	2021年6月 （小山茂春資料館案内時）	1945年滋賀県生。父は、「アメリカ村」について研究し、多くの著作を残した郷土史家、小山茂春。母の実家のある滋賀県で生まれ、その後父の家がある三尾村で高校卒業まで過ごす。現在は、兵庫県芦屋市在住。
錦濱文子	1回目：2021年8月2日 （三尾の自宅、三尾雅信同席）	女性、1935年氷川丸（カナダから日本に来る船）で母が妊娠、本人は三尾村で生まれる。父は、三尾カナダ連絡協会初代会長、錦濱光之助。光之助の回顧録など資料を閲覧し、戦後の経験について聞いた。
	2回目：2021年9月24日 （オンライン、三尾雅信同席）	父、光之助と、本人の人生と兄弟の話を聞く。進駐軍のところへ行った三尾の女性たちについても証言があった。
寺下節子	2021年8月23日 （堺市の自宅）	女性、1930年カナダ生。1941年、10歳の時に日本に来た。東京で過ごしたのち、1943年、父母の故郷である三尾へ疎開に来る。三尾小学校卒。1945年3月～1947年1月日東紡績（広村：現広川町）の試験室に入社。そこでは、進駐軍の案内係も勤めた。
大森宣子	2021年9月10日 （三尾の自宅）	1932年南部町生。1949年日高高女卒。1955年三尾で結婚。1967年、三尾の婦人会へ入る。義理の父は元三尾村村長大森喜代蔵。婦人会の活動内容について聞き、婦人会の資料は残っていないと聞く。

（2020年11月5日~2021年10月25日の聞き取りより筆者作成）

聞き取り調査の語り手は、本論文の対象者となる占領軍メイドと「戦争花嫁」となった「当事者」ではないので、「当事者」でない人々の証言としてオーラル・ヒストリーを研究手法に取り込む試みとなる。「非当事者」となる、占領下の「アメリカ村」を生きた人々や現在の三尾の人々が、占領軍メイドや「戦争花嫁」を中心とした三尾村の戦後史について、どのような経験をし、何を記憶しているのかを考察したい。

また、占領軍メイドから「戦争花嫁」となった当事者である、ケネディ冨久枝と手紙でのやりとりをすることができた。筆者が10の質問を作成し、それに回答してもらうかたちで、

返信を得た[6]。こちらは、占領期の経験を「当事者」に聞くことのできた資料となる。

加えて、中野幸と光明寺より提供いただいたケネディ冨久枝とその家族の写真も、分析対象とする。

図1 吉田家家族写真（一番右：冨久枝（10歳）、右から2番目：吉田トミノ（40歳）、前列右から3番目：昭子（8歳）、その他：カナダの小学校の先生家族）

図2 進駐軍勤務時代の冨久枝
（写真提供：中野幸）

図1は、カナダ移民時代の冨久枝家族と知人家族の写真で、図2は、進駐軍勤務時代の冨久枝の写真である。本論文が研究対象とする、占領軍メイドとして働き、「戦争花嫁」として渡米した三尾の女性である。戦前のカナダ移民と占領下のメイドや「戦争花嫁」のあいだには、人々のまなざしと記憶のされ方に大きな違いがある。この違いこそが「空白」となってきたものであり、本論文の主題であるが、これを解明するためには、移民史、三尾村史、占領史、ジェンダー史の多領域を横断する視点が必要となる。

1章では、三尾村の地域史をまとめた主要な研究として、福武直『アメリカ村：移民送出村の実態』（1953）を取りあげ、三尾村の概況について述べる。そのほか、第2次世界大戦下におけるカナダ移民の強制移動・収容・送還の歴史について詳しい岡本［2008］、飯野、高

村、原口編［2016］、Kobayashi［2018］から、戦前・戦中・戦後をまたいで日系カナダ人がどのような移動をしたのかをまとめる。以上に加え、筆者の聞き取り調査をもとに、とりわけ戦後を中心とした三尾村の姿について明らかにする。2章では、占領期に着目し、「アメリカ村」を生きた人々が占領軍労働に従事していたことについて、移民と占領軍労働、さらに新しいジェンダー秩序がどのように絡み合っているのかについて考察する。ここでの新しいジェンダー秩序とは、占領期、GHQによってもたらされた「男女平等」の政策を指す。豊田［2007］は、「女性解放」という名のもとに、女性への参政権付与や男女同一賃金などの改革がなされた一方で、女性が家庭の「妻」や「母」として、あくまで家計補助のための就労に制限され、経済的市民権は奪われたと指摘する[7]。占領期の社会を考察するうえで、「女性解放」という政策がもたらした新たなジェンダー秩序と、占領がもたらした不均衡な関係という構造に着目し、そのなかで占領軍労働に従事した三尾村の人々、とりわけ占領軍メイドとして働いた三尾の女性の経験と記憶を考察する。そのさい、「占領者」としての側面が強い語学兵から、「弱い」立場にあるメイドについて議論するために、「貢献」と「適応」（adaptation）[8]という分析枠組を適用する。3章では、筆者が行った聞き取り調査を中心に、三尾村の女性で、大阪や東京の占領軍家庭のメイドや電話交換手として働き、「戦争花嫁」として、アメリカやカナダに渡った人々に関する経験と記憶について述べる。

1章　移民村三尾村の戦後史

本章では、三尾村の戦後社会について整理する。他の先行研究が、戦前・戦中の移民送出先のカナダでの移民を中心にまとめているため、戦後の移民送出地を起点として、三尾村の移民史について考察することに意義がある。本論文では、戦後だけでなく、戦時下の三尾の人々の経験についても述べるが、筆者による三尾の人々への聞き取り調査を通して、戦時下の経験を述べる人が多くあり、戦時下の経験が戦後の経験と密接に結びついているためである。また、在カナダ日系人にとっても、1949年まで私有財産没収や移動の制限などが課せられていたことから、1945年で戦争が終わったと捉えられるか検討する必要がある。

福武［1953］[9]は、1951年6月、7月、12月に実施された村民へのインタビュー調査を中心として、1888年の工野儀兵衛による移民開始前から移民「最盛期」、戦後の三尾村の社会についてまとめた。歴史、人口形態、産業、教育、文化などが、村民への聞き取り調査と人口統計資料などをもとに詳述されている。とりわけ、「占領期」に調査されていることもあり、移民2世の進駐軍関係の労務者の実態について言及している点は注目に値する。 その後の多くの先行研究が同書を参照していることからも、福武による研究の成果がうかがえる。本論文では、福武［1953］を最重要文献と位置づけ、これを中心に論を進める。

1節　戦時下における強制移動・収容・送還と引揚者―カナダからの流れ

まず、三尾村での移民送出の要因としては、耕地面積の狭小さと人口増加による窮乏が挙げられる[10]。1888年の工野儀兵衛のカナダ渡航に始まり、血縁・地縁による呼び寄せから、三尾村出身者のカナダへの移民は、1901年から1908年までに計362名にのぼり[11]、彼ら／彼女らはBC州、とくにスティブストンに集

住した。しかし、筆者が行った聞き取り調査では、三尾村の人々は貧しかったためにカナダへ移民をしたのではなく、「アメリカ」に自分の意志で渡航したのであるという声が聞かれた[12]。「貧しい」などのネガティブなイメージの強い移民であるが、移民たちがもっていた「あこがれ」という主体性に着目した移民研究[13]も近年みられるように、移民の送出要因を貧困にのみ見出すことはできないことが、筆者による聞き取り調査を通しても分かった。

もともと出稼ぎ的性格の強かった移民の形態は、妻や家族の呼び寄せにより定住型へと、大正期ごろから変化していく。アメリカ大陸を中心に、移民排斥運動が高まり、1907年には「レミュー協約」によりカナダへの渡航が許可されたのは、「①再渡航者およびカナダ在住の日本人妻子、②カナダ在住日本人家内使用人、③契約移民、④カナダ在住の日本人農業経営者の必要とする契約移民とされ、②と④は年間400人以内までと制限され」た[14]。しかし、三尾村、カナダ間の移民は妻の呼び寄せなどにより継続される。太平洋戦争勃発前の1939年には1,448名にのぼり、本籍人口総数が3,230名ということを考えると、村民の約半数近くがカナダに渡航していたことが分かる[15]。

アジア・太平洋戦争が始まると、連合国軍側であったカナダは、日系人の強制移動・収容の政策をとる[16]。カナダ西海岸のBC州に集住していた日系人らは、東側の奥地への移動を強制させられ、一部の青・壮年らは強制収容され、労働に従事させられる。この政策は、日系人の居住や移動、財産に関する自由が認められる1949年まで続いたが、1944年のキング首相による政策は、日系人の忠誠と不忠誠を選別し、不忠誠な日系人を送還すること、そして在留者を戦前集住していたBC州に集中させないように、カナダで拡散して居住させることを決定した。これにより、日系人は日本への送還かカナダ、ロッキー山脈の東側への在留の選択を迫られた。ロッキー山脈の東側にとどまった人々の動向は本論では扱わないが、岡本［2008：50］によると、1946年からの5回にわたる送還で、計3,964人の日系カナダ人が送還された。そのうち、425名[17]が三尾村出身者であった。

図3 1946年11月、カナダ移民引揚時の写真（写真提供：中野幸）

図3は、カナダ移民の上山由太郎（中野幸の祖父）がカナダから日本に引き揚げる時に親戚や知人と撮影した写真である。上山は、「1946年11月10日（日曜日）加奈陀ビー・シー・カムループス　ウエストサイドの上山農園にて祖国に帰る人達を中心に撮影」と付記しており、計21名が写っている。カムループスは、日本人が多く集住していたバンクーバー、スティブストンより東部にある山岳地帯で[18]、中野によると、漁業ではなく、農園を経営していた上山は、強制移動や収容の対象にはならず、日本引揚の1946年まで、自宅のある農園で過ごせたという[19]。そのとき、バンクーバーから「疎開」してきた親族や知人を農園に受け入れ、日本引揚時に写真を撮影したそうだ。上山の引揚時のスーツケースは、カナダミュージアム（美浜町三尾）で展示されており、引揚者の中で一番大きな荷物を持って帰って来たという[20]。

日本への送還・帰国者としては、戦前からの日本への帰国者[21]や1946年以降の送還者などが混在している。終戦後の三尾村では、戦前のカナダ移民からの送金が1949年まで停止していた[22]ことと復員・引揚者が増加したことにより、貧困の問題が深刻であった。村内で働く場所がなく、引揚者の2世の多くは、村外へ職を探しに行き、その就職先の一つとして進駐軍関係の職を見出したとされている[23]。

戦後の三尾村にはカナダからの引揚者が多くいたが、筆者の聞き取り調査では、カナダだけではなく、満州や朝鮮、シベリアからの引揚者や復員者の存在が明らかになった。西浜律子（女性、1935年生）は、カナダ生まれで、カナダでの強制移動が始まる前に日本に一度帰国し、その後父の仕事に伴い、朝鮮に行き、朝鮮から引き揚げてきた。そのほか、三輪町子のように、満州で生まれ、幼少期に家族と引き揚げた人もいることが分かった[24]。三尾村の郷土史家である小山茂春も満州で従軍後、シベリアに抑留されていた[25]。三尾の人々の戦時下の経験としては、カナダでの日系人強制移動・収容・送還の記録が多いが、そこに含まれていない三尾の人々の移動について射程を広げることで、カナダとのつながりだけが三尾の歴史であるという特殊性の強調のなかで埋没する人々の存在を明らかにすることができる。西浜律子のように、カナダや朝鮮へ仕事に行く父親に同伴した家族の移動があり、その父も時代ごとに「移民先」を転々としていた。また、西浜律子は「着の身着のままで」帰って来ており、先述したカナダからの引揚者である上山とは対照的である。

以上のことから、三尾の人々がカナダへ移民として渡航しただけでなく、帝国日本のなかで移動をしていたことが分かる。小山茂春のような従軍者もいれば、西浜律子のようなカナダ生まれで朝鮮からの引揚者もいる。1930年代、北米では移民排斥の機運が高まり、一方で日本では朝鮮や満州への本格的な移民送出が始まる。小山や西浜、三輪の経験は、これらの時代背景を映し出す移動であるだろう。蘭［2018：191-192］は、満州開拓のために「派遣」された満州移民が、敗戦により命からがら日本に帰国し、日本での定着に苦労し、高度経済成長期には都市部の労働力不足を補うために、都市へ移動し、さらにブラジル移住が本格的に開始されると、ブラジルへ農業移民として移動していくことを指摘している[26]。同じ構図が三尾村の「カナダ移民」の経験から読み解くことができるだろう。帝国の移民政策と人々の移動の変遷を追うことで、時代ごとにどのような移民政策が、どのような意図をもってつくられたかがよく分かる。在カナダのカナダ移民にとっては、戦争と国家の間で家族や友人、知人と引き裂かれたという歴史がある。しかし、そのカナダとの往

来の歴史だけでなく、勢力圏の帝国日本を横断し、「戦争」に翻弄された人々がいる。

2節　戦時下から終戦後の三尾村―三尾村での経験

本節では、多くの移民を送出し、「母村」としての性格を強めた三尾村を中心に、ローカルな視点から、三尾での戦時下から終戦後の人々の経験と記憶を考察する。

三尾村での戦時下の経験は、1945年3月14日、B29による逢母集落への焼夷弾攻撃が文献に記述されている[27]。また、『美浜町史』（下巻、p.330）や福武［1953：30］は、「アメリカ村」と呼ばれた三尾村が、戦時中白眼視されたことも述べている。しかし、筆者の聞き取り調査では、逢母集落の被害や「アメリカ村」に対する白眼視にとどまらない人々の戦争にまつわる経験と記憶が明らかになった。まとめると、①米軍機が三尾村上空を飛ぶ様子や爆弾が落ちる様子を見ていた人々の記憶と、空襲から逃げる人々の経験、疎開者の存在、②学徒動員（大和紡績（御坊市）や日東紡績（広川町））の経験、③満州や朝鮮の移民と引揚経験、以上の3つになる。①の米軍機による攻撃については、「怖かった」や「花火を見ているみたいだった」などの記憶が聞かれた[28]。②の学徒動員については、西浜千鶴子が、「学生が一番の犠牲者だ」[29]と語っている。③の帝国日本からの引揚者の存在は、1章1節で述べた、朝鮮からの引揚者である西浜律子、満州からの引揚者の三輪町子、またシベリアからの復員兵である小山茂春の経験がある。

以上のような戦時下の三尾の経験があったことが分かったが、終戦後の三尾村は、425名の引揚者をむかえることになり、引揚者の支援が急務であった。引揚者のなかには、進駐軍労働に就き、就労先を求めて、県外へ出ていく者もいた。彼ら／彼女らの多くは、農地改革によって海外在住者の土地が強制的に没収され[30]、住む家や食糧の確保が困難であった。ただでさえ、戦後の日本社会は食糧難であり、三尾村在住者の食料も十分ではなかった。聞き取り調査でも、戦争中だけでなく戦後もしばらく白米は食べられなかったという人も多くいた。

また、「母村」の三尾在住者は、戦前までカナダからの送金に頼っていたため1949年までカナダからの送金停止措置により、より一層困窮したといえる。三尾カナダ連絡協会の初代会長、錦濱光之助の回顧録『思い出の記：壮年時代を経て老年期に至る』（1977年、4号）では、終戦後の三尾村の家族の窮乏状況が分かる。錦濱は1946年5月または6月に日本に引き揚げた。引揚後の家族の様子を次のように記している。

> ○○（筆者注：長女）は三尾郵便局に務（ママ）めてあった。彼女は女学校卒業後は御坊の三和金融に務（ママ）めてあったが、長い間戦争で内には預金額もなくなっていたので恥しいと云って三和をやめて郵便局に務（ママ）めることになったのだと云ってあった。実際私は毎年必ず彼等家族の生活費は送金していたのだが戦争が始まる前年よりアメリカが金融封鎖の處致を日本にとったので毎月百弗しか送金できなかった。それから六ヶ年戦争中は一仙も送られぬままに終戦となって私が帰る迄どこからも金がはいてこなかった。妻は或る時は山から出す薪をせほって（背負って）一日なにがしの賃仕事をしたし二女の○○は女学校を出て塩たきを岬の海辺まで出て行って一日僅かの塩を造ってそれを日高の百姓屋にもって行って食糧とかへてくれることとしたと云ふ。（p.1）

ここから、戦前は光之助がカナダで働き、日本の家族に送金をすることで生活を成り立たせていたが、アメリカの金融封鎖の措置に伴い、日本の家族への送金ができなくなり、三尾の家族は経済的に窮乏していたことが分かる。父に代わって、母やその子供たちが働いて、金や食糧を確保したのである。当時中学生だった、光之助の末娘である錦濱文子は、学校で映画を見に行ったときに持って行った弁当について、このように語る。

> 私なんの弁当持って行ったと思う。ひろあき兄貴と。ぬかパンやで。米ついた、ぬかパン、塩入れて、焼いて、持っていきやったん。(中略)ひろあきと、ひいちゃん、あがら米のごはん持ってきてないさかな、ぬかパンやさか、2人やこっちで食べよって。煙樹ヶ浜下りたとこでよ、塩入れたぬかパンが昼食やで。私。ほいてもう、ここの、主、錦濱光之助がカナダから帰ってきたら、田畑全部戻します、戻しなさいってゆうね、父ね、証印とってあったん。ほかみな小作にとられてしまってあったんで、小作に全部。けど、父が終戦後帰って来たときに、もう戻してくれた。全部[31]。

錦濱文子は、「ぬかパン」のことを強調して話し、戦後の食糧不足の時代を「ぬかパン」をキーワードに記憶している。さらに、米が食べられなかったという錦濱の記憶から、戦前からの移民が、戦後農地改革によって土地を失うという「海外不在地主」の問題が明らかになる[32]。これについては、安岡［2014］が詳しい。本論文では、次節で詳しく扱う。

3節 再渡加―三尾カナダ連絡協会心に

1950年、三尾カナダ連絡協会(連絡協会)が設立され、カナダからの引揚者がまたカナダに戻るという再渡加が促進される。425名の引揚者のうち、104名の2世は1951年末までに再渡加した[33]。和歌山県でも同時期、1952年の和歌山県海外協会、1953年の和歌山県庁移民課の設立が進み、県内の「過剰人口」を、北中南米地域など、海外へ送出する[34]動きがみられた。終戦による復員・引揚者の増加や農地改革、インフレなどによる経済的困窮が背景であるといえる。美浜町中央公民館所蔵『移民一件綴』(1963年～)では、和歌山県庁の地方支部、日高振興局が、三尾村を含む日高地方で、北中南米を中心とする「海外移住」を促進した経緯が分かる。海外移住者名簿のなかには、三尾村出身者も数名みられ、三尾村からも戦後移民が送出されていることも明らかになる。

連絡協会[35]の果たした役割として大きいのは、終戦後の引揚者支援とその後1950年代以降のカナダへの帰還支援である。そのなかで、1951年10月に設立された同協会トロント支部は、カナダ・トロントのリバーマッシュルーム会社への就労斡旋を行った。会社側からの希望採用者としては、カナダ移民2世であり、肉体労働が可能な20歳から40歳までの男子であった。その結果、12名の渡航希望者があり、翌1952年には計26名がカナダに渡航した[36]。連絡協会初代会長の錦濱光之助によると、トロント支部を経たマッシュルーム会社雇用が最も多数の再渡加を促し、そのほか、BC州の造船所と農場、アルバータ州などに計103名が錦濱の会長在任中に渡航した[37]。福武［1953：38］が指摘する104名の再渡加者と同様の渡加者であるかは不明であるが、錦濱の記録では、少なくとも425名の引揚者のうち、103名はこのように三尾カナダ連絡協会を通して、カナダ各地へ新たな就職先を求めて渡航したことが分かる。

このように、連絡協会を中心に、1950年以

降、カナダからの引揚者は再びカナダへ戻っていくという移動がみられるが、新たな就労先を求めた三尾の人々について、錦濱は占領期に強行された改革と関連付けて、以下のように述べている。

> カナダから帰った人達の中に現在先祖代々から持ちつたへた田畑がどうしても戻してくれずそのまま僅な（米五升位の価値）もので手放し失望と食糧難にあへいできた三尾人はいくらもあった。カナダへ帰らふと小供（ママ）が云ひ出す。もう三尾と縁切りだと怒る。再び故郷へは帰ってくるものかと歎息さしたのがこの問題が或る程度の影響があったのだ[38]。

錦濱は、再渡加の要因の１つとして農地改革を挙げている。1章2節で述べた、海外不在地主の問題を指摘した文章だ。海外不在地主が多かった三尾村では、在外日本人の土地所有者の帰国前に土地の買収・売り渡しが行われた[39]。錦濱の場合、戦前に小作人との契約で、光之助の帰国後に土地を返してもらうよう取り決めていたことから、戦後、返却された農地で家族は農作を続け、食糧難をしのいだ。とはいえ、在外地主の田畑が農地改革で喪失したことにより、失望と食糧難にあえいだ引揚者が多かったという。さらに、「三尾と縁切りだと怒」り、「再び故郷へ帰ってくるものかと歎息」したほど、引揚者にとって農地改革は切実な問題であった。そして、これが三尾村の人々の再渡加を後押ししたと考えられる。

このように、三尾村では三尾カナダ連絡協会を中心として、戦後の三尾村の人々の再渡加を促進したといえる。一方で、この時代はまだアメリカと同様、カナダでも日系人の渡航は厳しく制限されていた。カナダ市民権を持つ在日の2世ですら、出生証明書だけではカナダに渡航できなかった[40]。そんななか、日本では就労先がなかなか見つからず、一方ではカナダのマッシュルーム会社は人材を必要としたという、戦後再渡加に関わる需要と供給の一致があった。そして、再渡加のプッシュ要因として、全国的な「過剰人口」を海外へ送出する動きがあったことと、農地改革が与えた人々への「打撃」が明らかになった。戦後移民の送出はこの時期で終焉をむかえ、高度経済成長期に入るころには、三尾村から移民を送出する動きはみられなくなる。

本章では、終戦後から1950年代を中心に、三尾村の戦後史を整理した。戦前のカナダ移民は、カナダで強制移動・収容・送還を経験し、一方で日本在住の三尾村の人々は、戦時下の空襲や学徒動員、帝国内の移動を経験する。終戦後、窮乏を極める三尾村では、カナダからの引揚者らが村外へ職を見出し、さらに1950年以降は、海外不在地主の問題も影響し、三尾カナダ連絡協会を中心として、引揚者の再渡加が促進された。既存の研究と筆者による調査より、三尾村の戦後史を議論したが、占領期という枠組みからは研究されていないことが分かる。この「空白の時代」にどのような人々のいかなる経験があったのかを、次章以降で明らかにする。

2章　移民村三尾村と占領軍メイド

本章では、三尾村の人々の占領期の経験を考察する。この時期、三尾村では占領軍労働に従事する者が多くいたことから、占領期の経験として占領軍労働に焦点を当てる。まず、『占領軍調達史』から、占領軍に関わる労働がどのように展開されたかを明らかにしたうえで、先行研究と筆者が行った聞き取り調

査をもとに、三尾村移民と占領軍労働について論じる。とくに、占領軍メイドとして働いた女性たちを中心に、同時代の「女中」と比較検討しながら考察を進める。

1節 占領軍労働と移民

敗戦後およそ7年にわたる占領政策のなかでは、多くの占領軍関係の労働力が必要とされた。『占領軍調達史』によると、占領に伴い、まず要求された労務として、通訳、占拠した兵舎、工場、飛行場等の清掃、整備、道路や橋梁の修理、舗装、防空壕のとりこわし、接収住宅の修理修築、軍需品の積卸し、運搬作業等があげられている[41]。これらの労務提供は、地方庁や市町村、警察署等に、軍から要求されたが、労務供給が追い付かず、強制的に労務者を割り出したり、県庁や市町村の職員らが供出されたりするほどであった。占領軍の建物接収に伴い、軍施設が充実すると、事務員、通訳、翻訳、技術者、技能士、ボーイ、コックなどに、職種と人員が拡充される。

調達要求は、1945年10月中旬以降、PD（Procurement Document、調達要求書）と呼ばれる文書によって、GHQから中央、各地方の終戦連絡委員会に通達された[42]。しかし、それまでの進駐初期は、各自治体や警察を通して労務要求がなされたというが、漸次、占領軍用労務者提供の専門仲介業者が、その役を担うようになった[43]。

占領軍労働は、終戦後、「安定した収入を得られる数少ない仕事」[44]として、人々の雇用先の1つとして機能した。本研究では、これらの占領軍労働において、「英語の堪能な」移民が関わっていたことを指摘したい。

移民と占領軍労働の関係について、佐藤［2015］は日系アメリカ人が語学兵として「進駐」したことを明らかにしている。アメリカをはじめカナダでも、「敵性外国人」として強制収容などが、日系人に対しておこなわれた一方で、語学兵などとして第2次世界大戦中、またはそれ以前の第1次世界大戦期から、日系人の従軍経験がみられた。日本の敗戦により、米軍は日本に進駐することになるが、この「占領者」のなかには日系アメリカ人2世もいた。佐藤［2015］は、日系移民が「占領者」としてどのように関わっていたかを考察したうえで、日本のルーツをもちながら、「勝者」の立場で日本と向き合うときに、苦悩や葛藤を抱いていたことを指摘している。

佐藤［2015］のオーラル・ヒストリーによって明らかになった語学兵のジレンマや苦悩は、米国への忠誠心や愛国心のもとに成り立つ「英雄物語」の構築性を批判している。本論文では、「被占領者」の側面が強い占領軍労働のなかの女性と対比するために、語学兵の経験については、占領という構造のなかでみられる「占領者」としてのみ扱い、またその多くは男性であったことを前提とする。「勝者」として日本占領に関わることに葛藤を抱えていた兵士もいるが、Azuma［2009］が述べるように、「占領者」としての性格は、彼らが進駐軍の日本占領に「貢献」したことを示す。Azuma［2009：204］は、このような語学兵の「占領者」としての性格と占領への「貢献」は、「被抑圧者であると同時に抑圧者（oppressed and oppressor at the same time）」であったと端的に指摘している。

一方で、本研究では「被占領者」として日系移民が占領軍労働にどのように関わっていたのかを明らかにしたい。三尾村の移民の事例は、占領軍労働と移民の関わりについて、日本在住者から占領軍労働に従事した「被占領者」の経験を示す。ここでは、『美浜町史』に加え、福武［1953］、山田［2000］、小山［1984］を参照する。

1章でも述べたように、福武［1953：464］によると、「（移民）2世が進駐軍関係の職を村外に見出した」という。「内地」他地域に居住する帰国者で、91名の俸給生活者には、進駐軍関係の労働者が多いが、その内訳は、進駐軍関係勤務者、警察、警察予備隊などの肉体労働従事者が中心である[45]。また、『美浜町史』（下巻、p.336）によると、村民は京阪神へ職探しに出、進駐軍関係の仕事に就いた。カナダからの引揚者を中心に、村外の進駐軍関係の仕事に就いた移民の経験がみてとれる。

山田［2000］や小山［1984］の聞き取り調査の中には、進駐軍労働経験者の語りがある。山田［2000：130-132］は、語学力を活かして、移民が通訳や電話局に勤めていたと考察している。勤務先は大阪・伊丹で、6年間勤めていた人もいる。また、小山［1984：86-87］が実施した1983年の三尾村在住者への聞き取り調査によると、カナダ生まれの2世、吉田芳一（調査当時63歳）が、大阪杉本町で、進駐軍の通訳を8年務めていた。彼はカナダでの強制収容後、日本に戻り、朝鮮戦争の終結に伴うキャンプの閉鎖まで働いていた。語学兵同様に、語学力を活かして通訳などとして活躍した移民の存在が明らかになる。

山田［2000：131］の調査は、「インフォーマントの多くが、この時期[46]を回想して人生で最もつらい時期だったと述べている」と明らかにした。同研究で、Mr.M（調査時66歳）は、「あんな仕打ちをうけたから、わしは白人をきらっとった。横浜に（進駐軍関係の）仕事があるからと勧められたが、あんな奴等のためには、働かんと思った」と述べている[47]。戦時下での強制移動の経験から、進駐軍関係の仕事に就くことへの「嫌悪感」が強かった人もいる。

以上のような、通訳などとして働いた移民には、「占領者」と「被占領者」の2側面がある。戦前から米軍に「貢献」してきた日系アメリカ人2世の語学兵もいれば、戦時下では強制移動・収容の経験にあい、「白人」[48]への「嫌悪感」をもちながらも、占領軍労働に従事する日系移民もいる。彼らに共通するのは、進駐軍の日本占領への「貢献」という側面である。通訳の移民は被雇用者であるが、彼らは同時に占領軍の日本占領に「貢献」していたともいえる。村内では仕事が見つからず、食糧難や住宅難といった問題もあり、「日本の大学生の英語よりも［通じる］」［山田2000：130］語学力が占領軍労働へのモティベーションとなり、生きる道を見出し、占領下の社会秩序に「適応」していった。以上のことから、「貢献」と「適応」のはざまで、占領軍労働に従事した三尾村のカナダからの引揚者の存在が明らかになるだろう。

2節　占領軍労働のなかの女性―占領軍メイド

本節では、占領軍労働者として働いた三尾の人々には、多くの女性がいたことが文献資料と筆者による聞き取り調査から明らかとなったことから、占領軍労働のなかの女性について考察する。占領軍労働のなかでもハウスメイドを中心に考察する理由は、聞き取り調査でハウスメイドの話が一番多く出てきたこと、それなのにこれまでハウスメイドの存在については明らかになってこなかったことが挙げられる。

三尾地区在住の中野幸[49]への聞き取り調査では、三尾の女性で占領軍メイドや電話交換手として、大阪・浜寺や箕面、東京・立川で働いた女性がいたという話を聞くことができた。このことは、福武［1953：62-66］にも裏付けられ、2世を中心として進駐軍メイドや通訳として働いていた女性が多くいた[50]。山田［2000：131］でも、1947年から6年間、大阪の進駐軍電話局で働いた女性がいると明らかに

なっている。女性の多くは、占領期当時、10歳代後半から20歳代で、2021年現在は80歳代～90歳代の方が多い。表2は、中野への聞き取り調査で明らかになった5名の女性が、占領軍労働につくまでの経緯と、どのような労働に従事していたかをまとめものである。

表2 占領軍労働経験のある三尾村の女性

名前（敬称略）	生年、生まれた場所	概要
冨久枝	1928年、三尾 （生後2か月で、カナダへ）	幼少期はカナダで過ごす。 1940年頃　小学校6年生の時、三尾小学校へ来る。カナダで日本語の先生になりたかったため、日本に教育を受けに来た。 1941年 カナダに帰るつもりだったが、病気になり、そのうち、太平洋戦争が勃発し、帰れなくなった。戦争前までは、カナダからの送金があったが、それが停止したため、滞在先の中野の祖母の手伝いをした。 1945年　終戦 三尾村役場から占領軍の通訳を依頼される。 →このときすでに占領軍の所で働き始めていたと推測される。 1946年　カナダから両親と妹昭子が引揚 年不明　浜寺でハウスメイド ⇩ 横田基地で電話交換手や通訳
昭子	1929~30年（図1引揚写真では、1946年に17歳と上山由太郎が記録）、カナダ・ナナイモ（BC州バンクーバー島にあるまち）	1946年、17歳のときに、両親と共に日本へ引き揚げ。姉の冨久枝は日本にいた。浜寺に行ったか定かではないが、横田基地など、基地の中の仕事もしていた。
和子	1929年、三尾（中野の叔母）	冨久枝とともに、浜寺にメイドに行く。カナダへの移民経験はなく、英語は分からなかったが、メイドをしながら覚えた。ハウスメイドとして、ワシントンハイツ（東京・立川）でも働いた。
A	1929年、三尾	父がアメリカ移民。アメリカから引き揚げてきた父から英語を習い、ハウスメイドになった。日高高女卒。ハウスメイドとして、3年間で4軒の家で勤務。勤務先は箕面。六甲山ではCIC（対敵諜報部）の隊長宅でもメイドを勤めた。

B	不明、カナダ	終戦後日本に引き揚げ、大阪で占領軍の仕事をした。

（聞き取り調査より筆者作成）

『占領軍調達史』では、事務員、通訳、翻訳、技術者、技能士、ボーイ、コックなど、主に男性を想定した職種が書かれているのみである。しかし、女性の就労先として、ハウスメイド、タイピスト、通訳、事務員、PX（軍施設内の売店）の販売員などが先行研究[51]から分かる。これら占領軍労働に女性がどのように関わっていたのかについての詳細な研究はされていないが、筆者が作成した表2より、ハウスメイド、電話交換手、通訳といった職種に、三尾の女性が従事していたことが分かる。

三尾村の女性の経験から、とりわけ占領軍メイドの就労実態をより詳細に明らかにすることができ、また、占領軍労働と移民の関係性を読み解くことができる。坂井、玉城［2012：129］は、占領軍メイドとして働いた女性の多くは、占領軍住宅の近隣に住む女性が多かったのではないかと推察する。しかし、三尾村の女性は、和歌山・三尾から大阪や東京など、遠方まで就労していたため、占領軍メイドは必ずしも近隣住民から集められたわけではない。また、新聞求人公告に、「英語の多少分る方」と応募資格が設けられていた[52]ことから、英語の分かる移民経験者という特性も関わっているといえる。先行研究で明らかにされている通訳などとして活躍した男性[53]も、三尾から大阪や横浜、沖縄などへ働きに出たことから、語学力を活かして、遠方まで就労に至ったと考えられる。

このことから、占領軍労働と移民の関係、さらにはそこに女性がどのように関わっていたのかを読み取ることができる。三尾村の女性の占領軍労働への就労経緯については、口づてによる要因が大きかったと考えられる[54]。筆者による聞き取り調査を通して、「○○さんとこの娘さんもメイド行ってた」「娘さんや年頃の子はみんなメイドに行った」という語りが、80歳代以上の女性の語り手から多く聞かれた。このように、複数の語り手が、占領軍メイドについて、具体的にどの人物がメイドをしていたか、また、同級生または年上の人がメイドに行っていたことを記憶していることが分かった。一方で、美浜町や和歌山県庁の公文書には、ハウスメイドの記録は残っておらず[55]、何人の三尾村の女性が、いつ、どこに、どのような経緯で就労したのかは分からなかった。

具体的な就労経緯については不明な点が多いが、吉田幸子（1929年三尾村生）は、浜寺の世話人の存在について語っており、三尾の男性が斡旋に携わったと推測される。浜寺の世話人が、「アメリカ村」というカナダやアメリカへの移民の多かった村で、英語の話せる人が多いと聞いて就労が始まったのではないかという[56]。しかし、吉田の父は、三尾の人と集団で、浜寺のメイドの世話をするよう声をかけられたが、吉田の祖母が「負けたとこへ行かしてくれ」ず、反対されたことで、メイドの斡旋には関わらなかったという。

吉田の語りから、⑴浜寺ハウス（キャンプ堺）の仲介人が、三尾村でメイドを「集めた」と考えられること、⑵占領軍への「貢献」を拒む人もいたこと、が分かる。坂井、玉城［2012：128］は、都道府県が占領軍メイドの労務供給を担ったと指摘しているが、⑴で示したように、民間のブローカーのような仲介人が、行

政とは別に雇用を斡旋していたと推測される。また、2章1節で述べた、「占領者」と「被占領者」のはざまの存在としての日系移民が、戦時下の強制収容などの経験による「嫌悪感」を抱きながらも、占領軍に「貢献」していたことについて、⑵で述べた吉田の祖母のように、「負けたところへ行く」ことへの反対がみられ、占領軍への「貢献」が周囲に否定されることもあったといえる。また、吉田の父のような「貢献」は、占領軍と直接の接触がなかったと考えられるため、2章1節で述べた語学兵や通訳とは異なる間接的「貢献」である。しかし、占領軍労働の斡旋者は、労働力を供給するという立場にあり、労働力として使用される「被占領者」の女性を「集め」、労働力として「供出」することで、占領への間接的「貢献」をしているといえるだろう。

さらに、筆者による聞き取り調査では、英語が話せた女性ばかりがメイドに行ったとはいえないということが分かった。とくにメイドのような基地の外の仕事は、語学力の有無が必須の条件であったとはいえない。A（1929年三尾村生、メイド経験者）によると、英語の分からない人たちも、待遇のいいハウスメイドを目指したという[57]。中野は、英語を習ってみたくて、メイドを志した女性も多くおり、さらに、子供のいる家庭にいけば、英語を習得できるという話を聞いたことがあるという[58]。

基地の中と外の仕事では、語学力の有無について大きな違いがある。冨久枝や昭子のように英語の話せる人は、基地の中の仕事に就くことができた。冨久枝は、自宅で肥くみをしているときに、役場の役人が来て、進駐軍のところで通訳をしてくれないかと依頼を受けたそうだ。中野は、「こんな格好（もんぺ）のときにゆわれて」恥ずかしかったと冨久枝が口にしていたことを、中野の母がよく話していたという[59]。冨久枝によると、当時仕事が必要で、英語もできたため、通訳（またはハウスメイド）として働き始めた[60]。昭子の職種は明らかではないが、冨久枝はハウスメイド、通訳、さらには軍経営のクラブの受付をしていた。このように、基地の中で働くことのできた女性は、ハウスメイドとは異なり、語学が堪能であったという共通点がみられる。

以上のことから、語学力を活かして、カナダ移民が占領軍労働に従事したといえるが、占領軍メイドの事例をみると、移民経験や語学力の有無にかかわらず、占領軍労働に関わった人々もいたといえる。これは占領軍労働のなかでも、職種により必要とされるスキルが違うということである。三尾村の女性の事例をまとめると、「村全体」で占領軍労働に従事するイニシアティブがあったと考えられる。英語の堪能な移民経験者をはじめ、知人・親戚の紹介でメイドなど占領軍労働に従事する女性の存在から、１つの地域から日本各地の基地や家族住宅へ就労するという人々の移動がみられる。メイドは「口づて」に就労に至ったと考えられるが、「アメリカ村」という村の特性が美浜町（合併前は三尾村）や浜寺の斡旋者をはじめとする周囲の人に占領期、進駐軍労働者として重宝されると認知されたということもこのことから分かる。

占領軍労働者は女性に限らないが、カナダからの引揚者らは、引き揚げ先の日本が占領されている状況に「巻き込まれ」、また「適応」した。占領軍労働への従事はその1例だといえる。村のなかでは仕事がなく、貧困の問題も深刻な中、彼ら／彼女らは占領軍労働を生きる道として見出した。それは、敗戦国の人々が占領に「適応」する過程でもあった。メイドは占領された弱い立場ではあるが、そこには主体性がみられ、彼女らは、占領されている状況に「適応」したのである。

3節　メイドと「女中」

本節では、同時代にあった「女中」について並行して検討しながら、占領軍メイドについて議論を進める。聞き取り調査の対象となった語り手の多くは、戦後の「女中」経験者であり、そのような語り手が同時代の占領軍メイドについてどのように捉えているのかを考察したい。一方では「白人家庭」のメイドに行く女性と、もう一方では日本人家庭の「女中」に行く女性がいたということが、同一村でみられるのは、「アメリカ村」と呼ばれた三尾村に特異的な状況であっただろう。

筆者による聞き取り調査を通して、進駐軍のもとで働いた女性らは、大阪や兵庫など関西圏へ働きに行くことが多かったと分かった。そのなかでも現在の浜寺公園（大阪府堺市）は三尾の女性たちの就労先の1つであった。冨久枝も、はじめは浜寺でメイドとして働き、昭子や和子、そのほか三尾の女性らも浜寺へ働きに行った。地理的にも和歌山・三尾から最も近い基地はキャンプ堺であり、浜寺公園に開設されたディペンデントハウス（DH）でメイドは働いたといえる[61]。浜寺という空間で、占領期、人々がどのように生きたかについては、さらなる考察が必要だろう。

1929年生まれのAは、終戦後、占領軍メイドとして働いた経験がある[62]。3年間で4軒の家庭に奉公に行き、MP（米軍憲兵隊）の家庭や、兵庫県の六甲山のCIC（対敵諜報部）の隊長の家庭で働いたそうだ。Aは三尾村生まれで、父がアメリカ移民だった。本人はカナダ／アメリカへは移民に行っていないが、引き揚げてきた父から英語を習い、日常会話は少しできた。そのため、終戦後の仕事がないときにも、英語のできるカナダからの引揚者同様、ハウスメイドとして重宝された。Aによると、日本人家庭で「お手伝い」に行っても、給料は「まねくそしかもらえな」く（筆者注：少ししかもらえなく）、進駐軍家庭のほうが給料をはじめ、大きなステーキを食べられるなど、「わけへだてなく」主人と同じ食事を食べることができ、待遇がよかったという。

西浜千鶴子（1929年カナダ生まれ）は、箕面でメイドとして働いていた友達のところへ遊びに行った経験がある[63]。当時、桜井駅（大阪府箕面市）周辺に家族宿舎が建てられ、そこで働いていた友人の勤める家庭へ遊びに行った。コーヒーをいれてくれたり、子どもをおいて出かけた主人の代わりに、子守を手伝ったそうだ。西浜はカナダ生まれの移民2世で、戦前に日本に来ており、以後日本在住である。英語も少し分かるが、箕面にいた親戚の紹介で、箕面の日本人家庭で「女中」をしていた。

2章2節でも述べた吉田幸子（1932年三尾村生）は、アメリカ移民の父をもち、英語を習いたくて、ハウスメイドに「あこがれ」たという[64]。戦時中は、「パパママもゆうたらあかん」状況で、英語も習うことができなかった。メイドに行きたかった理由を聞くと、アメリカ帰りの父に英語を少し習ったが、戦中は家の外で英語を話すと、友達にのけ者にされ、米の配給が停止されるので、話したくても習いたくてもできなかったと語った[65]。戦時中に抑圧された「アメリカ」に対する感情は、戦後、進駐軍の占領により、解放へと変わった。一方で、吉田の父は、「娘が白人のとこへ行くのを反対し」、芦屋の日本人家庭で「女中」に行かせた。吉田の父がハウスメイドに行くことを反対した理由は、次節で詳しく扱うが、吉田によると、「女中」に行くことは人間修養であるという。「人の家のごはんを食べて、人の気持ちが分かる」と、結婚前に3年間、「女中奉公」をした。

このような「女中奉公」について、山田［2011：

114-115］が、「カナダへの移民の開始以前から、同村の女子は行儀見習いとして、大阪方面に奉公に出る習慣があった」と述べている。『日高新報』の記事においても、「女中」は1950年代前半まで募集が続いており、需要の高さが分かる[66]。これに対して、坂井［2015：230］は、「遠近の差はあるとしても、近代において女性が、結婚によって実家から他出したり、修学や奉公、就労などを契機に転居したりすることはむしろ日常的なことであった」とし、山田［2000］がいう「通過儀礼」的な意味合いが、行儀見習いや花嫁修業としての「女中奉公」に内在しているだろう[67]。

「女中」とメイドにまつわる三尾の女性の語りは、同時代に出版された雑誌の寄稿と重なり合う部分がある。女中サークル誌『あさつゆ』[68]（希公会、26号、1956年）では、基地で働くメイドとの座談会の感想を、「女中」である岡田温子が、外国人家庭で働くうえでの文化的差異や勤務時間や給料などの待遇のよさを認めながら、一方的な解雇による不安定雇用はメイドと「女中」の共通点であると述べている[69]。「メイドさん達はもっとはでな人達かと思いましたが、（中略）まじめに生きようとする人々も、けっして少なくないことです。」（p.24）、「基地で働いているとはいいながら、同じ日本人なのですから、へんな目でみないで、仲よくして下さい」（p.25）とメイドが語っていたという。

以上、同時代の占領軍メイドと「女中」について共通するのは、「行儀見習」という側面があったことと家事労働という職務上の性質である。筆者の聞き取り調査でも、占領軍メイドのことを「女中奉公」と言い換える人は多くあり、占領軍メイドが占領期に特異な「女中」ではなく、戦前から続く「女中」と連続して捉えられていることが分かる。清水［2004：147］は、戦前からの「女中」を検討しながら、占領軍メイドについて「戦後復興期の女中として注目されるのは、アメリカ駐留軍家庭のハウスメイドである」と述べている。清水［2014：150-151］の研究では、ハウスメイドの給料の高さや物質的な豊かさなど待遇のよさについて述べながら、一方で世間から「白眼視」されたことや「誘惑や淪落の脅威にさらされる」存在として結論付けられている[70]。

このような、占領軍メイドの特殊性と「女中」との連続性が三尾の事例からみられる。坂井、玉城［2012：147］も、日本人家庭での「女中」と占領軍メイドでは、労働上の待遇の違いはあるが、雇主と雇用者の「経済的、社会的格差や、女性の労働を家計補助的、結婚前の一時的なものと位置付ける性役割を基盤に成り立った」と指摘している。さらに、清水［2004：150-151］が明らかにしたメイドに対する偏見は、坂井、玉城［2012：147］が述べる「アメリカを中心とする連合国と日本あいだの力関係の差のなかで生まれた」ことによるものだろう。「女中」との連続性が明らかにするのは、家事労働という性別役割分業観に根差した不安定かつ、主人と奉公人（＝「占領者」と「被占領者」）という不均衡な関係のもとで成り立った労働の実態である。

「被占領者」として雇われた三尾村の女性は、カナダからの引揚者であるか、日本生まれ日本育ちであるかに関わらず、占領軍メイドとして働いた。占領軍メイドに付帯されたさまざまな「偏見」は、彼女らの存在を現在に至るまで「忘却」させた。「アメリカ式」の豊かな生活様式に触れつつ、それに「あこがれ」る人もいれば、カナダでの生活との連続性から、それに「適応」する人もいた。占領軍によってもたらされた民主主義は、新たなジェンダー秩序を日本にもたらした。婦人解放から男女平等を掲げる新秩序は、同時に「占領」という「特殊」な状況下で、米国人男性が日本人女性を「征

服」するという力関係も生んだ[71]。終戦後の食糧難や就職難の時期で仕事が必要だった、周りにメイドに行っている人がいた、アメリカ文化に「あこがれ」たというプッシュ要因と、大量の進駐軍兵士とその家族の生活の家事労働一切を担う人員が必要だったプル要因が重なり合った地点に、占領軍メイドの存在がみられる。それは、戦前からの「女中」と同様の性質を持ち、不安定な雇用や、占領による、「強者」としての「占領者」と「弱者」としての「被占領者」という関係性を内包した主従関係や、女性に課される家事労働などの性別役割分業観があることを示し、三尾の女性、そしてカナダからの引揚者らはそのような状況に「適応」したのである。通訳もメイドも、不均衡な国家関係の中の被占領者である。そのなかでも、メイドは周縁化された存在であったが、占領者を介して、就労の場を得たり、アメリカ文化を受容することで、主体性を発揮し、占領されている状況に「適応」した。

4節　「アメリカ文化」を受容する女性へのまなざしの変化―服飾に着目して

同時代のメイドと「女中」を比較することで、占領期の新たなジェンダー秩序に、三尾村の女性がどのように支配され、同時にそれに「適応」してきたのかが分かった。本節では、中野への聞き取り調査を通して、カナダ移民や占領軍メイドの服飾と、それに対する人々のまなざしの変化を考察する。

図3　カナダ移民引揚時の写真（再掲）

ハウスメイドの女性は、戦前のカナダ移民と似た洋服で、ワンピースやヒールを着用している。1章1節で紹介した引揚者が、カナダで日本への引き揚げ時に撮影した図3を再掲した。服装に着目すると、男性は、スーツやニット、スラックスを着用し、なかには帽子を被っている人もいる。女性は、ワンピースにヒールのスタイルが多く、トレンチコートや大きなファーのついたコートを着ている人もいる。少年は成人男性と同様に、ニットとシャ

ツ、それにスラックスという格好である。

さらに詳しく、カナダ移民時代（1946年の引揚前まで）から占領期における、女性の服装の変化をみる。中野と光明寺より提供の図1、2、5を図3と合わせて考察する。

図1 吉田家家族写真（一番右：冨久枝（10歳）、右から2番目：吉田トミノ（40歳）、前列右から3番目：昭子（8歳）、その他：カナダの小学校の先生家族）（再掲）

図2 進駐軍勤務時代の冨久枝（再掲）

図4 左：進駐軍勤務時代の昭子、右：昭子の友人と思われる（写真提供：中野幸）

図1の吉田家の家族写真と図3の引揚写真は、カナダ移民時代の移民の服装の1例を表している。たとえば、『カナダ移住百年誌』は、明治以降のカナダ移民の送出により、母村では「洋装の女性・カナダから送って来た派手なセーターやシャツ、赤いチェックのジャンパーを着た老人」（p.36）がみられると述べているように、カナダ風の洋装がカナダ移民の象徴として挙げられている。図2と4は進駐軍勤務時代の三尾の女性で、どちらもワンピースにヒールという、カナダ移民時代の身なりと変わらない。

では、占領期を経て何が変わったのだろうか。それは、占領下にもたらされた構造的な変化による、洋装への日本人の意識の変化である。ダワー［2004］（上巻）や西川［2017］が述べているように、占領軍と関わる女性に対するまなざしは大きく変化し、洋装は「派手な」格好であり、占領軍兵士との「接触」を暗示する象徴となった。

筆者による聞き取り調査より、具体的な変化が読み取れる。中野は子供のとき、メイドに行っていたAから真っ赤なマニキュアを塗ってもらった[72]。マニキュアの記憶から、メイドの女性は「おしゃれ」な格好をしていたという。中野が1950年生まれであることを考えると、1950年代後半、「本土」の占領が終わり、Aはメイドの仕事を終えて三尾に帰って来ていたと推測される。その間に、中野とAのような、占領軍労働を通して得た真っ赤なマニキュアを媒介とした、ハウスメイドと地元民の交流がなされたと考えられる。三尾のメイドの多くは住み込みであった[73]が、就労中も休みの時に地元に帰ってくることはあっただろう。ここでの真っ赤なマニキュアは、占領期のアメリカ文化の象徴であり、メイドを介して、「あこがれ」として他の女性や子供たちの目に映ったのではないだろうか。

「女中」として働いていた吉田幸子は、ハウスメイドに「あこがれ」ていた[74]。アメリカ合衆国への移民である吉田の父は、第2次世界大戦前に日本に帰国し、日本では大工として働いた。2章2、3節で述べた、戦後三尾のメイドの斡旋を断った彼は、ハウスメイドに行きたいという娘の吉田に対して、「行くんだったら家から帰って来んな」と強く反対した。吉田は、父がアメリカで働いた経験があり、白人のところ（ハウスメイド）で働くのは甘くないと言った。吉田はハウスメイドに行った友人から、白人は「ええんやで」と聞き、より一層ハウスメイドに行きたくなったそうだ。

吉田の経験は、アメリカ移民の父と浜寺のハウスメイドに行く引揚者や同級生が身近にいることで、占領期前から占領期にかけて、アメリカ文化への「あこがれ」を形成したことを示す。そのような「おしゃれ」な文化、アメリカの生活に「あこがれ」て、メイドに行くことを希望した女性もいたが、吉田のように家庭によって反対される場合もあった。ここには、連合国軍による占領が、男性的認識としての「敗北」と女性的認識としての「解放」という、異なる認識があったことを示している。

筆者による聞き取り調査では、メイドなど占領軍労働に従事した人たちのことを尋ねると、「派手な人たちだった」という声も聞かれた。同じ洋装でも、戦前の「見た目」と占領期における「見た目」への意味付けの違いは歴然であり、また同時代の「見る人」によっても捉え方が異なる。戦前はカナダ移民の象徴であった「おしゃれ」な服装が、占領期において「派手」と捉えられるのは、占領がもたらした男性／女性＝「占領者」／「被占領者」という非対称性が影響しているだろう。

三尾村はカナダ移民送出の地域であり、西洋文化への親しみも慣習的にあるが、占領期における「おしゃれ」な文化への「あこがれ」は

戦前のそれと異なる意味を持っている。吉田のようにアメリカ文化に「あこがれ」をもつ人はおり、戦前の写真花嫁のなかにも、カナダでの生活に「あこがれ」て、カナダ移民との結婚を望んだ人もいた[75]。移民村三尾村という地域で、戦前から戦後にかけてもたれたアメリカへの「あこがれ」の意識は、自分の意志でカナダに移民に行った人たちと同質である。ダワー［2004：156］（上巻）が、PXを「魔法の国からやってきた宝物庫」と表現し、占領期のファッションが「アメリカ」の魅力であったと述べているように、ハウスメイドに行かず、日本人家庭の「女中」を経験した女性も含めて、三尾の女性がアメリカへの「あこがれ」をもったのも「自然」である。

2章1節で述べたような、日系アメリカ人2世の語学兵は「占領者」として、日本で通訳として雇われた男性は「占領者」と「被占領者」のはざまの存在として、そして2、3節で述べた占領軍メイドなどとして働いた女性たちは「被占領者」として、さまざまなかたちで「占領」に関わった。占領への「加担」を「貢献」、占領されている状況の主体的「受容」を「適応」と考えると、語学兵、通訳、メイドの間には、「貢献」から「適応」へのグラデーションがみられる。個人の経験はこのような構図に当てはまらないかもしれないが、本章で明らかにしたいのは、占領軍労働をとおしてみられる、占領がもたらしたジェンダーの対比的な構図である。図5はこの構図を図示したものである。

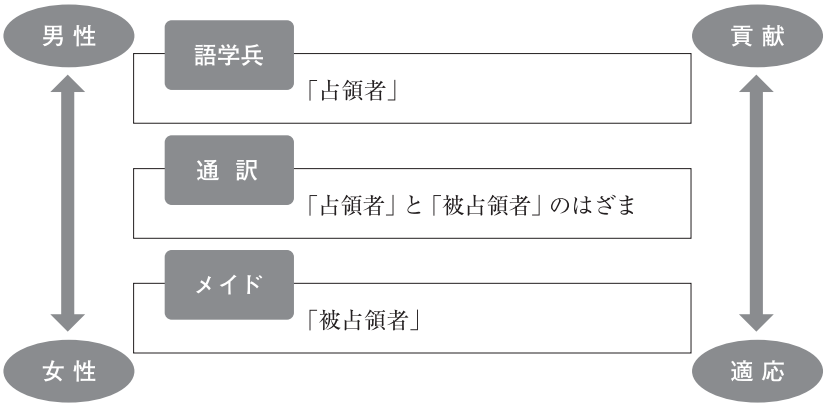

図5 語学兵から占領軍メイドへの占領に対する態度の違い（筆者作成）

移民経験のある人から、移民2世、さらには移民村の在住者を含めた移民のなかで、語学兵、通訳、メイドの三つを分類した。語学兵の多くは男性であり、「占領者」であることから、占領への「貢献」がみられる。引揚カナダ移民で通訳として働いた大半は男性で、「占領者」と「被占領者」のはざまの存在であり、「貢献」と「適応」の両側面をもっている。日本が米国を中心とした連合軍に占領されている状況に「適応」したと同時に、彼らは占領への「貢献」をしていた。一方で、占領軍労働に従事した三尾の女性の大半は占領軍メイドとして働き、「被占領者」である。加えて、筆者による聞き取り調査で明らかになったように、「あこがれ」をもってメイドを志望した／まなざした女性の主体性から、彼女らが占領に「適応」したと

もいえる。メイドにとっての主体的な「適応」は、通訳の男性のそれとは違い、アメリカ文化への「あこがれ」の意識と積極的な文化受容の態度によるものだろう。2章4節で考察した戦前から占領期にかけての洋装に対するまなざしの変化は、占領によってもたらされたジェンダー規範が影響しているが、洋装を身に着け、郷里の人々にそれを広める女性の主体性が聞き取り調査の語りで明らかになった。このことは、「弱い」立場にあるメイドが「占領」されただけでなく、占領に「適応」したという主体性（agency）を意味している。

3章　移民村三尾村の戦後史

本章では、占領軍メイドなどの進駐軍労働に従事した女性で、職場で出会った進駐軍兵士と結婚し、渡米した「戦争花嫁」について、戦前の移民経験との関係性に着目しながら論じる。

1節　移民村三尾村における婚姻の歴史と「国際結婚」

まず、三尾村での婚姻形態について戦前からの歴史を概観する。福武［1953：102-103］は、三尾村では村内婚が多いと指摘する。なかにはイトコ婚もみられ、移民地（カナダ）と母村（三尾村）の血縁的つながりを維持するためという理由が大きかったといわれる。写真花嫁もその一形態であり、移民先の三尾の男性と結婚するために、カナダに渡航した女性も数多い[76]。また、移民先でも三尾村出身の2世同士が結婚することが多かったという。

次に、戦後の婚姻関係に目を向けると、移民3世の「国際結婚」が中心議題となっている。山田［2000：217］は、三尾にルーツをもつ日系カナダ人3世への調査[77]で、結婚相手の人種的背景として、日系人44.5%、日本人4.5%、東洋人6%、白人42%、非白人3.5%という婚姻状況にあるとしている。この世代は、他のエスニック集団との結婚、つまり「国際結婚」が多く見られる。このことから、村内婚から「国際結婚」への変化が戦前から戦後にかけてみられる。

それでは、その間の終戦後、「空白の時代」である占領期における婚姻形態はどのようであっただろうか。1世と3世の婚姻形態の違いについては先に述べたとおりだが、2世の婚姻形態に関しては、山田［2000］が村内婚は続いていたということ[78]と、帰加2世のほとんどが日系人と結婚していた[79]ことをわずかに指摘しているのみである。そこで、中野への聞き取り調査から、2世を中心とする世代の婚姻形態について分析する。

半世紀以上にわたってアメリカ大陸への移民を送出してきた歴史を持つ三尾村では、終戦前までは、「国際結婚」はまだ珍しかったことが上記の先行研究からいえる。中野によると、この時代、占領軍の下で働いた女性5名のうち3名は、進駐軍兵士と結婚しており、その後カナダやアメリカに渡航しているという[80]。この3名の女性の経験について、中野の語りをさらに詳しくみていく。

中野の大叔母の子供にあたる冨久枝は、大阪・浜寺でハウスメイドとして働いた。そのほか、横田基地では通訳として働き、基地の中で働ける人は英語がよくできる人であったと中野は言う。冨久枝のように、基地の中で出会った兵士と恋愛をし、結婚し、渡米した女性は多かった。冨久枝の妹の昭子も同様に、横田基地の中の仕事を通して出会った日系アメリカ人兵士と結婚し、渡米した。冨久枝と昭子姉妹の両親は、三尾村からカナダへ移民をした1世で、姉妹は2世となる[81]。カナダでの生

活も長かったため、英語はよくできたという。

また、カナダ移民2世ならではの経験もある。Bは、カナダ生まれの2世で、終戦後日本に帰国し、大阪の進駐軍の仕事に就いた。仕事をやめた後はカナダへ戻ったが、Bを追いかけてカナダまで会いに来たアメリカ人兵士が彼女の夫である。結婚後はアメリカ在住で、Bの経験について中野は、引揚者は日本に帰って来てもまたカナダに戻ったという[82]。背景には、カナダ生まれの2世であるので、カナダの市民権を保有しており、渡加しやすかったことがある。また、Bのように、カナダの市民権を保有していた女性は、「戦争花嫁」以前に渡航することができたのである。

2章で述べた占領軍メイドは、本節で分析した占領軍メイドから、職場で出会った兵士と結婚した女性の経験をつなぐ接点となる。占領軍労働が「出会い」の場となり、占領期を通して、移民村三尾村でも2世を中心に「国際結婚」がみられるようになったといえる[83]。

2節 三尾村の「戦争花嫁」

前節では、戦前からの三尾村での婚姻形態をみたうえで、占領期、占領軍労働を通して、進駐軍兵士と結婚した三尾村の女性の存在を明らかにしたが、日本人「戦争花嫁」を「占領軍などの兵士と結婚し、夫の国に移住した女性たち」[84]と定義すると、三尾村の女性も「戦争花嫁」といえる。本論文は、歴史的用語として「戦争花嫁」を扱い、島田［2009］など先行研究で提示されている事例や枠組みから、三尾村の女性の経験と記憶を分析し、彼女らの経験と記憶から、既存の「戦争花嫁」について検討したい。

まず、「戦争花嫁」の先行研究としては、林［2002］や安冨、スタウト［2005］、島田［2009］が代表的である。そのほか、NHKアーカイブスで放送された「戦争花嫁たちのアメリカ」（2019）がある。林［2002］は、ジャーナリズムの視点から、アメリカの「戦争花嫁」への取材を行った。島田［2009］は、女性移民史の発掘という目的で、「写真花嫁」と「戦争花嫁」についてとりあげている。いずれの先行研究でも、進駐軍兵士と結婚した女性への差別と偏見に満ちた社会のまなざしと、アメリカ、ハワイ、オーストラリアなど「異国の地」での困難を乗り越え、「戦争花嫁」に付帯するネガティブなイメージを払拭する「草の根の親善大使」として結論付けられている。

以上の先行研究をふまえて、三尾村での「戦争花嫁」の実態を考察する。「戦争花嫁」のなかには移民経験者がいたこと、さらに「占領」という秩序のなかの「戦争花嫁」を徹底的に分析し、その歴史を明らかにしたい[85]。これまでの研究では、当事者の語りの分析とメディアの言説の分析が中心に行われてきた。しかし、本論文では「当事者」への聞き取り調査ができなかったことと、主要メディアの報道はすでに研究されていることから、三尾村の人々の「戦争花嫁」に関する記憶を中心に、米山［2003］や西川［2017］といった占領期研究を参照しながら、「占領」という機構のなかでどのような「戦争花嫁」の歴史があるのかをジェンダーの視点を交えて検討する。

表3は、表2でまとめた三尾村の占領軍労働経験者のうち、その後、職場で出会った進駐軍兵士と結婚した女性について、表2の占領軍労働の内容に、3章1節で紹介した3名の女性の結婚までの過程を加えてまとめたものである。3名の女性のうち、冨久枝（2021年現在、アメリカ在住）のみ手紙で話を聞くことができた[86]。そのほか2名は、筆者による聞き取り調査のなかで語られた人々である。

表3　三尾村の占領軍メイドと「戦争花嫁」

名前（敬称略）	生年、 生まれた場所	メイド	結婚
冨久枝	1928年、三尾（生後2か月で渡加）	1940年頃　小学校6年生の時、三尾小学校へ来る。カナダで日本語の先生になりたかったため、日本に教育を受けに来た。 1941年　カナダに帰るつもりだったが、病気になり、そのうち、太平洋戦争が勃発し、帰れなくなった。 戦争前までは、カナダからの送金があったが、それが停止したため、滞在先の中野の祖母の手伝いをした。 1945年　終戦 三尾村役場から進駐軍の通訳を依頼される。 →このときすでに進駐軍の所で働き始めていたと推測される。 1946年 カナダから両親と妹昭子が引揚 年不明　浜寺でハウスメイド ⇩ 横田基地で電話交換手や通訳	夫はLee Kenedy。軍のクラブの受付の仕事をしているときに出会った。結婚して、1965年（37歳）に渡米。PXで買ってもらった結婚指輪が中野幸宅で保管されている。結婚後、アメリカでは仕事をしていない。夫は、渡米後、軍の消防士を勤めた。当時は渡航先のアメリカの人々の理解が得られなかった。子供はいない。
昭子	1929～30年か（1946年で、17歳）、 カナダ ナナイモ	1946年、17歳のときに、両親と共に日本へ引き揚げ。姉の冨久枝は日本にいた。浜寺に行ったか定かではないが、横田基地など、基地の中の仕事もしていた。	横田基地の中で知り合った日系アメリカ人2世と結婚。渡米後、夫は軍をやめてクリーニング店を開く。娘2人がいる。
B	不明、 カナダ2世	終戦後日本に引き揚げ、進駐軍の仕事（大阪）	単身でカナダに帰ったが、基地で出会った兵士がカナダまで追いかけてきて、求婚された。その兵士と結婚し、アメリカ在住。

（聞き取り調査より筆者作成）

表2で示した5名のハウスメイド経験者のうち、3名が進駐軍兵士と結婚していることが表3より分かる。3名の経験は、既存の「戦争花嫁」研究のなかでは検討されてこなかった「出会い」の場が占領軍労働であったことを示すものとなるだろう[87]。この3名の女性のほかにも、進駐軍兵士と結婚した三尾の女性はまだいると考えられる。

加えて、「戦争花嫁」にはカナダ生まれやカナダでの移民経験がある2世などの移民も関わっていたということが重要な論点となる。占領軍労働と移民の関係を明らかにしたことで、進駐軍兵士の夫との「出会い」の場となる占領軍労働に従事した彼女らが、のちに「戦争花嫁」として渡米するという流れがみられる。カナダでの生活と占領期の生活、結婚後のアメリカでの生活がどのように影響しあっているのか、「当事者」への聞き取り調査が困難であったため、詳しくは分からなかった。しかし、移民経験があるということと英語が堪能であるということが、彼女らが占領軍労働に従事する土壌となったことはいうまでもない。また、アメリカ大陸での生活経験がすでにあった人にとって、結婚後、アメリカで再び暮らすことは、「異国の地」で暮らすことと同等であったとは考えにくい。

一方で、冨久枝は、アメリカに「あこがれ」を抱き、結婚し、渡米したという[88]。カナダで生後2か月から12歳まで過ごした経験のある彼女にとって、アメリカは「あこがれ」の対象であり、アメリカが「異国の地」としてまなざされているとも考えられる。さらに、冨久枝は、「主人と知り合い結婚した頃は、現在とちがい、終戦後の時代でアメリカにあこがれ、アメリカへ来て、こちらの田舎の人々のあまりにも無知にガッカリしました。」という[89]。先行研究でも明らかになっているように、「戦争花嫁」は被占領者の日本だけでなく、占領者であるアメリカからも侮蔑のまなざしを向けられる対象となった。「戦争花嫁」は占領者にとっても、被占領者にとっても受け入れがたいものとして認識されており、そして冨久枝のような個々の経験は、アメリカに「あこがれ」を抱いたが、渡航先のアメリカの人々との認識の乖離があったことを明らかにするものである。

占領期に占領軍兵士と結婚した三尾の女性を「戦争花嫁」の枠組みから考察したことで、既存の「戦争花嫁」では指摘されてこなかった、占領軍労働が「出会い」の場になったということと、そこには戦前からの移民も関わっていたということが明らかになった。移民の関わりについては、満州などからの引揚者が占領軍労働に従事し、「戦争花嫁」となる帝国の移動経験との関係性を、江成［1981］や林、田村、高津［2002］などの先行研究における事例が示している[90]。筆者が明らかにしたことは、三尾村のカナダ移民のような、戦前の勢力圏外の移動経験が、戦後の「戦争花嫁」の「送出」と関わっているということである。そして、1章で述べた帝国の移動を含めた「アメリカ村」の戦時下の経験から引揚、再渡加への歴史に埋没していた、三尾の「戦争花嫁」の歴史を掘り起こすことができた。

3節　占領がもたらしたジェンダー規範から占領軍メイドと「戦争花嫁」を考える

日本占領は「成功」のモデルとしてイラク占領のときにも運用されたが、軍国主義を「徹底的」に排除し、民主主義が高揚され、人々の生活の隅々まで影響を及ぼした。戦勝国の米国人「男性」と敗戦国の日本人「女性」という不均衡な関係を保ちながら、占領期に女性の地位向上に関するさまざまな施策が実施され、改革されたことは大きな意義があった。一方で、占領という「支配」と「被支配」の関係性の

なかで、「忘れられた」経験があったことも明記すべきである。今回研究対象とした占領軍メイドと「戦争花嫁」はその１つの事例である。占領軍メイドについて、三尾村のなかでその話がされたことがあるかという筆者の質問に対する中野の語り[91]は、メイドと「戦争花嫁」の忘却の歴史を反映するものであった。

（筆者）メイドに行ってはる方けっこう多かったと思うんですけど、その話とかって村でよくされたりしましたか。

（中野）その、白人の家であそこも働いてるとかなんとかって子供の頃に聞いてあれやった。そしたらなんていうん、そこの白人と結婚するんやとうってゆうて。じゃあそこはものすごうるさいお家だったっていうか、難しい。だから白人と結婚するって勘当されたとかよ、そんなんとかよく聞いたね。そこほやからもともとカナダに、カナダとか行かなかったお家の子供だったんかな。ほいで余計親が反対してあれした。ちょうど冨久枝さんの近くに住んでたんよ、その人ね。その人ももう亡くなったけどね。アメリカのな、冨久枝さんの近くに住んでて、で、行き来してたりしてたって言うけど。だから最初はもう親が勘当したとかよ、白人と結婚するなんて。ましてや負けたあのそんなとこのアメリカの人らと結婚するってゆって。ちょっと格式のあるそんな家だったんかな。（中略）

でまあ子供のいる、子供のいるとこへ働きに行ったら英語を覚えるとかね、そういうこととか、そんなんとかよく聞いたな。やっぱりそういう若い人おしゃれできるやん。何ていうか日本のあれとちごて。なんかほやから結構そんなとこへおしゃれな格好できるし。やっぱりそういうの憧れたん違う。

ほやからまあ三尾の人はあんまりキャバレーとか飲み屋さんとか、そんなとこで働くんじゃなしの、あのその何て言うん、昔皆そんなんパンパンとか言うたって聞いたことあるやろ、パンパンって。そんなとこで働いた人とか。そんな人はほとんど三尾にはないわ。三尾の人はだいたいハウスウォークして。ほやから白人と結婚したっていう人もね私知ってる人で、1人、2人、3人、4人、5人、5人ぐらい聞いたことあるかな、その白人と結婚したというのはな。結構、よそ、県外の人は飲み屋さんとかそんなとこで働いて、白人と知り合うて。でも私は惚れられたのよーとか、追っかけられたのよーとか言ってね、ゆうてたよ。アメリカ、冨久枝さんとこ行ったらその友達が来てな、スージーさんていう人も、さっき亡くなったってゆった、そのスージーさんも追っかけられたのよって言うてたよ。

ほいでもね、その人ら向こう行ってまた英語の学校行ったりとか、英語の学校行って看護師になったりとかゆうてた、結構みんな頑張り屋なあ、そんなついていく人は。あの、家反対されて行った人もあるやろし、いろいろ。向こう行った人結構頑張り屋な。まあそんな三尾ではねそんななんていう、飲み屋で働いて白人とどうよってそれは聞いたことなかったな。それでも東京のおばさんとこ行って、東京のおばさんって、カナダアメリカのその冨久枝さんとこ行って、友達なんか白人がそういうとこで働いちゃあたとか、なんかそんな聞いたことある。追っかけられたのよとかゆって。

村の中で占領軍メイドについてどのような話がなされたのかという問いに対して、①戦勝国の白人との結婚への強い反対と②飲み屋で働く「パンパン」との混同を避ける語りが聞

かれた。「おしゃれ」ができる「あこがれ」の存在であった占領軍メイド／「戦争花嫁」は、一方で敗戦国の日本人女性がアメリカの進駐軍男性に「とられる」存在として捉えられたと考えられる。村全体でメイドの斡旋は行われ、可視化された存在としていたはずのハウスメイドや「戦争花嫁」が、のちに「語られない」存在として潜在化されたことは、三尾村史を振り返ればわかる。

上記の中野の語りを詳しくみると、まず、①戦勝国の白人との結婚を反対する家庭が多かったことは、多くの先行研究がすでに指摘しているとおりである。浜寺ハウスで働いたことのあるシルバー京子のように、進駐軍兵士との結婚を父が強く反対した［植木2002：231-261］事例などがある。三尾村でも同様に、戦勝国の白人との結婚を反対することはあったが、中野の語りでは、「カナダとか行かなかったお家の子供だったんかな。ほいで余計親が反対して」と、カナダ移民を経験していない家庭では、親が反対することがあったと述べている。ここから、カナダ移民は「戦争花嫁」、すなわち白人との交際により寛容であり、移民経験者ではない人は狭量であったという考えが読み取れ、そのような家庭もあったということが推測される。

しかし、カナダ移民をしていない家庭が「異人種間」の交際に必ずしも否定的で、移民経験のある家庭は肯定的であるとは限らない。安富、スタウト［2005：186-193］が、家父長制が残存する日系アメリカ人コミュニティと日本社会は構造的に類似していると述べているように、「古い価値観」をもっている移民も少なくなかった。三尾村でも、戦前から村内婚が続いており、血縁・地縁が重視されていた背景をふまえると、とくに移民1世にとっては、「異人種間結婚」は許容されるものではなかったかもしれない。また、2章で紹介した「女中」として働いていた吉田幸子は、アメリカ合衆国への移民経験のある吉田の父に、メイドに行くことすら強く反対された。これは、戦勝国の「白人」と広義で「交際」することが、村の男性にとって「屈辱」として経験されたことを示すだろう。

次に、②の「パンパン」との混同を避ける語りでは、三尾の人はキャバレーなどで働く「パンパン」ではなく、ハウスウォーク（ハウスメイド）をして、白人と結婚したと、差別化をしていることが分かる。ここから、「パンパン」をキャバレーや飲み屋で働く女性と捉えていることも分かる。『日高新報』では、1948年に「闇の女を生んだ者：貞操問題と男性えの抗議」（7月1日）、「男性も貞操を持て：女は性慾の對象でない」（7月2日）という寄稿が白バラ乙女と名乗る人物によりされ、「〈納涼問答〉パンパンの歴史」（7月22日）、「〈納涼問答〉パンパンの歴史（２）」（7月23日）、「パンパン嬢の枕枕枕枕金（ママ）：遊興費か宿泊料か」（8月２日）と題する記事が相次いで報じられている。当時、御坊町（現和歌山県御坊市）の南北新地には売春宿が多くあり、そのような売春業に関わる女性らをまとめて「パンパン」と称している。中野が生まれる前の新聞記事ではあるが、日高地方で「パンパン」に対する認識が、米兵相手の街娼ではなく、売春業に関わる女性全般と捉えられ、経験され、記憶されてきたといえる。このような背景で、中野も「パンパン」について、飲み屋やキャバレーで働く人たちと捉えたのではないかと考えられる。

また、2章4節で述べた洋装の「おしゃれ」な格好は、戦前のカナダ移民の象徴であったが、占領期においては、「パンパン」との混同をもたらした。ダワー［2004：148］（上巻）や西川［2017：247］が述べているように、ロングスカート、ハイヒール、ナイロンの靴下、派手な口紅、マニキュアに、ハンドバッグを持った姿

は、進駐軍兵士との関わりを示唆し、戦勝国の男に「寝取られた」日本人女性の象徴ともなった[92]。中野が語ったように、占領軍メイドや「戦争花嫁」が着用する洋装は「あこがれ」をもって、地域の女性を中心にまなざされた一方で、占領期における洋装に対する社会的な意味付けは、戦前のカナダ移民の象徴から、進駐軍兵士との「関係性」の暗示や「パンパン」の連想へと変化していった。

このような「戦争花嫁」と「パンパン」の混同と、その混同を避ける言説について、ウォント盛［2017］は、「パンパン」と「戦争花嫁」の研究は、両者を分断しているとし、2言説を結びつける試論を行い、戦後を生きた女性の経験を再評価している。戦争花嫁研究の文脈で、林［2005］は、「戦争花嫁」は「草の根の親善大使」であり、「パンパン」ではなかったと述べることで、「パンパン」というスティグマを払拭する試みをしているが、「パンパン」であった「戦争花嫁」との分断をうみ、「戦争花嫁」を「パンパン」というスティグマから解放したとは決して言えないという[93]。一方で、パンパン研究の文脈では、茶園［2014：75、281］が、進駐軍と関わりを持った日本人女性は、「パンパン」というスティグマを押し付けられ、沈黙を強いられたが、戦後の困難な時代を乗り越えた力強い女性であると述べている。これに対し、ウォント盛［2017：6-8］は、沈黙を破った「パンパン」であり「戦争花嫁」である女性2名の出版物を分析し[94]、「パンパン」と「戦争花嫁」は分断されるものではなく、密接な関係性をもっていると論じている。

ウォント盛［2017］は、「パンパン」と「戦争花嫁」を相関するものとして論じ、「パンパン」や「戦争花嫁」の女性とその子供である「混血児」を、戦後の厳しい時代を生き抜いたサバイバーとして再評価している[95]。しかし、筆者による聞き取り調査では、占領軍メイドと「戦争花嫁」の接点を見出すことができ、そこには「パンパン」にまつわる言説や占領という秩序、戦前からの移民経験が複雑に絡み合っていることが分かった。また、三尾村では、占領軍メイドと「戦争花嫁」は沈黙を強いられ、忘却されてきたことは明らかである。三尾村に限らず、沈黙を破ることのできた女性は少数であり、占領軍メイドと「戦争花嫁」の当事者や当時を知る人々が少なくなるなか、さらなる聞き取り調査や文献調査を行うことは喫緊の課題である。

中野の語りを再度検討すると、スージーさんという女性は、「追っかけられたのよー」と言って、白人と「恋愛」をした人物として語られた。「パンパン」との混同を避ける語りと同様に、三尾の女性は「飲み屋で働いて、白人とどうよってことはない」のに対して、県外の人は、「パンパン」であったか、「パンパン」とみられるに値したという差別化をしている。本論文は、誰が「パンパン」で、誰が「パンパン」でなかったかを議論するものではなく[96]、「パンパン」との混同を避ける語りから、三尾村で当時、占領軍メイドや「戦争花嫁」は「パンパン」とまなざされたと推測されることを強調したい。村内婚が続く占領期の三尾村において、村外の、ましてや戦勝国の男と「出会い」、「恋愛」し、「国際結婚」する女性への偏見があったことを示唆している。それは、占領／被占領という不均衡な国家関係が、社会や個人のレベルでは占領者＝男性／被占領者＝女性というジェンダーの不均衡を内包し、日本人女性は日本人男性の「所有物」であるという従来の意識が、進駐軍と「接触」する女性が戦勝国の男に「とられる」ことで崩壊したことを意味する。

「戦争花嫁」の当事者による語りのなかで、ブレア照子は、「日本が他国の戦争基地とならなければ、（中略）戦争花嫁は誕生しない」と

述べている[97]。ブレアの語りにあるように、「戦争花嫁」は「占領」の産物であり、「異国の地」で奮闘する「草の根の親善大使」という言説は、容赦ない「戦争花嫁」に対する、日本国内や米国での国境をまたぐ偏見があったことの裏付けである。

このような社会状況のなかで、筆者による聞き取り調査で明らかになった5名のハウスメイド経験者と3名の「戦争花嫁」、そして周囲の人々の経験と記憶は、占領軍メイドと「戦争花嫁」が、「占領」される存在としてだけでなく、占領に「適応」する主体として立ち現れる。占領軍メイドや「戦争花嫁」がもった、アメリカ文化への「あこがれ」という意識は、周囲の女性にも「共有」され、記憶されている。これは、男性主体の占領下の経験や記録のなかでは語られず、「忘却」されてきたものである。

おわりに

本論文では、占領期における和歌山県三尾村の人々の経験と記憶について、占領軍メイドと「戦争花嫁」に着目して検討した。1章で論じた三尾の戦中から戦後の経験において、農地改革による海外不在地主の問題は、「土地を取り上げられる」ということが、在外地主や引揚者への「打撃」となり、戦後のカナダ移民の再渡加への原動力となった。また、戦前移民が「あこがれ」をもってアメリカ大陸へ渡航したことも分かった。2、3章で議論した、占領軍メイドと「戦争花嫁」の女性たちは沈黙を強いられてきた。これまでの調査自体が男性中心主義で行われてきたことで、抑圧され、看過されてきたことの結果だろう。そもそも、三尾村や和歌山県全体の占領期に関する研究は極めて少ない。しかし、和歌山の歴史において、占領期はなかったものではなく、語られてこなかった時代である。本研究で明らかにしたように、占領への「適応」という女性たちの態度は、彼女らが「占領」されただけでなく、占領に「適応」しようとしたエイジェンシーがあったことを示す。

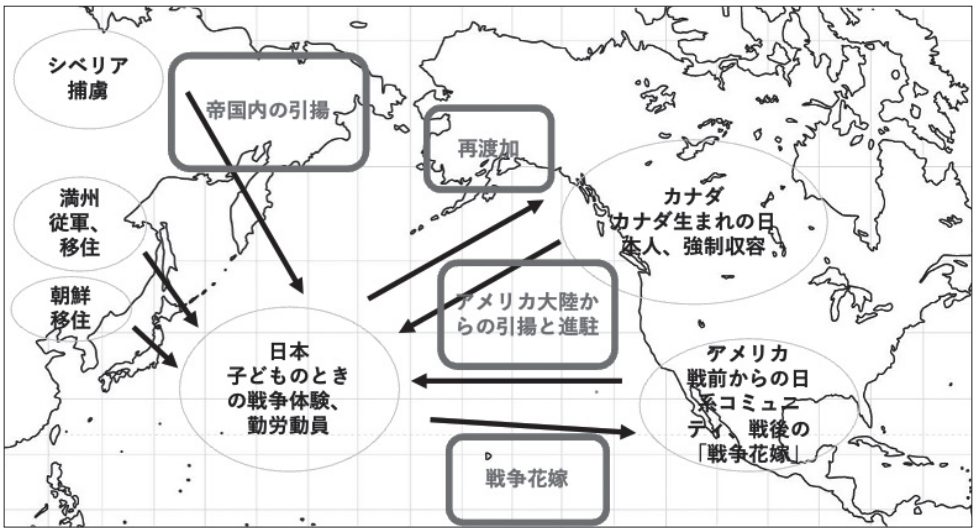

図6　戦時から戦後の「アメリカ村」を起点とした人々の移動（筆者作成）

図6は、従来戦後の人々の国境を越えた移動に含まれていなかった「戦争花嫁」の移動性と、帝国内または帝国外からの引揚、米軍を中心とした連合軍の進駐、引揚者の再渡加の関係性を示す。興味深いことに、戦後の海外移住について、1952年～1963年までの旅券発給は計12万人以上となっており、渡航先の第一は米国で6万人越えであり、その大半が「戦争花嫁」であると、『政府の窓』（1963年1月1日、法務省民事局）が指摘している。

これまでの研究では、土地を均すように「不要な」歴史を排除し、「都合のよい」歴史をマスターナラティブとして提示する「整地化」が進んでいる。そのため、占領期における占領軍と移民経験者（とくに女性）の「接触」の経験は語られてこなかった。三尾村の女性の経験に焦点を当てることで、戦前からの移民が、終戦後、占領下の日本で占領軍労働に従事し、「国際結婚」をし、和歌山、大阪／東京、カナダ／アメリカを越境していたことが分かった。

本研究に関連する先行研究は膨大である。そのなかでも、英語文献を中心としたカナダやアメリカでの資料収集は今後の課題となる。三尾村移民や日系カナダ移民に関する文献が多数、ブリティッシュコロンビア大学図書館で所蔵されている。また、錦濱光之助の『思い出の記』といった手記や占領軍メイドや「戦争花嫁」に関する新聞、雑誌記事のような、未発掘の一次資料はまだあるだろう。国立国会図書館憲政資料室や米国国立公文書館（NARA）所蔵の日本占領関係資料など、占領期の経験を占領者の側の視点からたどり、占領軍労働と「戦争花嫁」の議論を深化させたい。また、今回の研究では和歌山県の公文書が部分開示となり、『連国使用人（人事）』に記載されている占領軍労働者の属性など不明のままである。今後、公文書館に当該文書を含む史料が移管され、適切に開示の判断がなされ、スムーズな情報公開が行われることを期待する。

加えて、国境を越えた移動が自由になるときには、カナダまたはアメリカ在住者への対面での聞き取り調査も行いたい。また、本論文では詳しく扱わなかったが、三尾村の女性の多くが大阪・浜寺にメイドに行ったということから、キャンプ堺を中心に、進駐軍家族用宿舎である浜寺ハウスがどのような空間であったのか、『大阪府史』や『堺市史』をてがかりとし、可能であれば聞き取り調査も行い、新たな研究への展望も開きたい。

参考文献リスト

雨宮昭一2008『占領と改革（シリーズ日本近現代史⑦）』岩波書店

蘭信三2018「満州移民の生活世界：集団引揚げ、中国残留を中心に」日本移民学会編『日本人と海外移住：移民の歴史・現状・展望』明石書店

飯野正子1997『日系カナダ人の歴史』東京大学出版

飯野正子、高村宏子、原口邦紘編2016「第二次世界大戦直後に日本に「送還」された日系カナダ人のその後」『海外移住資料館　研究紀要』11号

和泉真澄2020『日系カナダ人の移動と運動：知られざる日本人の越境生活史』小鳥遊書房

植木武編2002『「戦争花嫁」五十年を語る：草の根の親善大使』勉誠出版

ウォント盛 香織2017「パンパンと戦争花嫁：二言説を紡ぐ試論」『比較文化研究 』125

江成常夫1981『花嫁のアメリカ』講談社

大門正克2017『語る歴史、聞く歴史：オーラル・ヒストリーの現場から』岩波新書

大林組社史編集委員会編1972『大林組80年史』大林組

岡本寿郎2008「第二次世界大戦における日系カナダ人のひとつの軌跡―和歌山県三尾村出身者の事例」『太平洋学会誌』30巻1号

カナダ移住百年誌編集委員会編1989『カナダ移住百年誌』美浜町カナダ移住100周年記念事業実行委員会

蒲田正男編1962『海を渡った日本の村』中央公論社

河上幸子、東悦子、西山巨章2020「和歌山アメリカ村の地方創生とルーツ・ツーリズム：移民研究の社会への還元に向けて」『移民研究年報』26号

窪川鶴次郎1953「ワシントン・ハイツ：ルポルタージュ」『中央公論』68号、中央公論新社

小山茂春1984『わがルーツ・アメリカ村：老人たちはいま』ミネルヴァ書房

――――1987『アメリカ村の看板婆さん』和歌山国際文化研究所

坂井博美2015「「19世紀～ 20世紀移動と労働」の成果と課題：「女性の移動」と男性・性売買」早川紀代、秋山洋子、伊集院葉子、井上.和枝、金子幸子、宋連玉編『歴史をひらく：女性史・ジェンダー史からみる東アジア世界』御茶の水書房

坂井博美、玉城愛著2012「占領軍家庭のメイド」小泉和子編『女中のいた昭和』河出書房新社

阪本博志編2017『高度成長期の〈女中〉サークル誌：希公会「あさつゆ」』3巻、金沢文圃閣

佐草智久2020「米軍統治下沖縄メイド研究：職業の実態と社会的役割を中心に」『日本オーラル・ヒストリー研究』16号

佐藤けあき2015「忠誠と苦悩の語り：日系アメリカ人二世語学兵の従軍・進駐経験」『日本オーラル・ヒストリー研究』11号

島田奈々子1957「傷だらけならばこそ」『世界』140号、岩波書店

島田法子編2009『写真花嫁・戦争花嫁のたどった道：女性移民史の発掘（日本女子大学叢書7）』明石書店

清水美知子2014『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社

下地ローレンス吉孝2018『「混血」と「日本人」：ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社

新保満1996『石もて追わるるごとく：日系カナダ人社会史』御茶の水書房

占領軍調達史編さん委員会編1956『占領軍調達史：占領軍調達の基調』調達庁総務部調査課

続日高郡誌編集委員会編1975『続日高郡誌』上巻、日高郡町村会

高嶋雅明1985『和歌山県の百年（県民100年史：30）』山川出版社

田村恵子2013「戦争花嫁」吉原和男、蘭信三、伊豫谷登士翁、塩原良和、関根政美、山下晋司、吉原直樹編『人の移動事典：日本からアジアへ・アジアから日本へ』丸善出版

ダワー・ジョン著（三浦陽一、高杉忠明、田代泰子訳）2001『敗北を抱きしめて：第二次大戦後の日本人』上巻、下巻　岩波書店

――――――（外岡秀俊訳）2013『忘却のしかた、記憶のしかた：日本・アメリカ・戦争』岩波書店

茶園敏美2014『パンパンとは誰なのか：キャッチという占領期の性暴力とGIとの親密性』インパクト出版会

豊田真穂2007『占領下の女性労働改革－保護 と平等をめぐって』勁草書房

西川祐子2017『古都の占領：生活史からみる京都1945－1952』平凡社

林かおり、田村恵子、高津文美子2002『戦争花嫁：国境を越えた女たちの半世紀』芙蓉書房出版

林かおり2005『私は戦争花嫁です：アメリカとオーストラリアで生きる日系国際結婚親睦会の女たち』北國新聞社

林林太郎1974『黒潮の涯に』日貿出版社

平井和子2014『日本占領とジェンダー：米軍・売買春と日本女性たち（フロンティア現代史）』有志舎

廣山實1996「戦後花形職業としての「メイド」について」沖縄市立郷土博物館編『あやみや』4号

福武直編1953『アメリカ村：移民送出村の実態』東京大学出版会

福永文夫2014『日本占領史1945－01952：東京・ワシントン・沖縄』中央公論新社

普久原朝健1996「メイドの聞き取り調査のまとめ」沖縄市立郷土博物館編『あやみや』4号

松本裕行2016「占領期における大阪の接収不動産についての調査」『空間・社会・地理思想』19号

水田治司2007『カナダ移民の子：帰化二世物語』（私家版）

美浜町史編集委員会編1988『美浜町史』上巻 美浜町

――――――――――1991『美浜町史』下巻 美浜町

宮城昭美1996「カーテンのゆれる娘心」沖縄市立郷土博物館編『あやみや』4号

森本、森茂2018「「移民」を研究すること、学ぶこと」日本移民学会編『日本人と海外移住：移民の歴史・現状・展望』明石書店

安岡健一2014『「他者」たちの農業史』京都大学学術出版会

安冨成良、スタウト梅津和子2005『アメリカに渡った戦争花嫁：日米国際結婚パイオニアの記録』明石書店

山田千香子2000『カナダ日系社会の文化変容：「海を渡った日本の村」三世代の変遷』御茶の水書房

――――――2011「カナダの日系移民：ジェンダーの視点からの考察」粟屋利江、松本悠子編著『人の移動と文化の交差』明石書店

米山リサ2003「批判的フェミニズムの系譜からみる日本占領－日本人女性のメディア表象と「解放とリハビリ」の米国神話」『思想』955号、岩波書店

和歌山県編1957『和歌山県移民史』和歌山県

和歌山県警察史編さん委員会編1991『和歌山県警察史』2巻、和歌山県

和歌山県史編さん委員会編1989『和歌山県史（近現代1）』和歌山県

和歌山県政史編さん委員会編1971『和歌山県政史大正編・昭和編1』2巻、和歌山県

――――――――――――――1968『和歌山県政史昭和編2』3巻、和歌山県

――――――――――――――1980『和歌山県政史昭和編3』4巻、和歌山県

Audrey Kobayashi et al. 2018“Exile: Mapping the Migration Patterns of Japanese Canadians Exiled to Japan in 1946.” Journal of American Ethnic History, vol. 37 no. 4. University of Illinois Press.

Azuma Eiichiro 2009 “Brokering Race, Culture, and Citizenship: Japanese Americans in Occupied Japan and Postwar National Inclusion.” Journal of American-East Asian Relations, vol.16 no.3. Brill.

NHK BS1スペシャル「戦争花嫁たちのアメリカ」2019年8月17日放送

The Best Films Archives「Life of a Japanese Bride in America After World War 2 Documentary Drama 1952」YouTube（2021年12月12日最終閲覧）

〈公文書〉

和歌山県1946『連合軍関係労務者採用一件』
————1946『金井知事川上知事知事事務引き継ぎ書』
————1948『連合国関係使用人（進駐軍警備員扶養家族、人事関係）』
————1951『連国使用人（人事）昭和23～24年度』
美浜町『移民一件綴』
『国会会議録』

〈新聞〉

『日高新報』1946年度～1952年度

〈その他資料〉

小山祐一『アメリカ村及び日の岬の将来と発展を願い親子2代の提案』（2008）
錦濱光之助『思い出の記』（1977年）
ケネディ冨久枝書簡

〈調査協力機関〉

カナダミュージアム
小山茂春資料館
和歌山市民図書館移民資料室

注

[1] 1954年の合併以後、三尾村は美浜町三尾地区となるが、本論文では合併前の名称として三尾村または三尾と表記する。通称である「アメリカ村」は、米軍を中心とした占領軍が日本／三尾を占領したことと、観光の文脈で使われる「アメリカ村」という呼称を比較しながら考察できるようにタイトルで用いた。

[2] 『美浜町史』（下巻）、pp.281-282。

[3] 河上、東、西山［2020：82］は、「アメリカ村」と呼ばれるようになった要因について、初期移民のころは、カナダが連邦に統一される過程であったこと、また、アメリカ合衆国とカナダを往来する人々がいたこと、三尾村の人々がアメリカ大陸へ行くという意味で「アメリカへ行く」と言っていたことと述べている。

[4] ここでの移民「最盛期」とは、1920年代を中心に想定している。福武［1953：77］は、1901年、1926年、1951年の各時期において、移民・移民経験者を持つ世帯数を調査し、その結果、1926年が最も移民の割合が高いと結論付けた。1920年代は、家族の呼び寄せやカナダでの移民の定住化が進む時期であり、多くの移民研究が当該時期を調査しているため、本論文でも1920年代を中心に移民「最盛期」として捉える。

[5] このほか、『カナダ三尾村人會と三尾公民館（カナダ館）』（1958年）、『第2次世界大戦中の回顧録』（1975年）などがある。

[6] 2021年10月14日筆者より冨久枝宛てに送付、2021年11月3日返信受け取り。

[7] 豊田［2007］、pp.2-4。

[8] 辞書的な意味としては、「the process of changing something, for example your behaviour, to suit a new situation」（Oxford Advanced Learner's Dictionary）と定義される。本論文が参照した先行研究では、三尾出身の日系カナダ人の文化変容を論じた山田［2000：301、319］が、1世から3世までの三尾村移民とその子孫が、カナダ社会への移住や定着過程で見せるそれぞれの反応を「適応」と述べている。敗戦国の「民衆意識」に着目し、占領期を研究したダワー［2004：6-7］（上巻）は、「敗

者の悲惨、混迷、悲観、怨念だけではなく、敗者の希望、回復力、構想、そして夢をとりあげ」、日本占領を「抱擁（embrace）」と捉えている。ダワー［2004］は「適応」と述べていないが、移民史と占領史、ジェンダー史での議論を包括的に捉えるために、山田［2000］とダワー［2004］をとりあげた。ここでの「適応」と「抱擁」の両者には、主体の「主体性」を含意しており、本論文では、「占領」という新たな社会に、三尾の女性がどのように「適応」したかという「主体性」を表現するなかで、「適応」と述べる。

[9] 毎日新聞社人口問題調査会（調査会）と共同で調査が行われた。同会から出版された『海外移民が母村に及ぼした影響』（1953年、毎日新聞社人口問題調査会）があるが、内容は福武直が東京大学出版会から出版したものと同様である。調査会は、1949年に人口問題について調査するために設立され、「農村における潜在失業人口」（1949年度）、「家族制度と農村人口」（1950年度）に引き続き、「海外移民が母村に及ぼした影響」として、三尾村の移民の実態が調査された。

[10] 『美浜町史』（下巻）、pp.281–282。

[11] 和歌山県庁の旅券下附者数（『美浜町史』下巻、p.986）。

[12] 2021年5月25日に光明寺で行った、住職の三輪映信（男性、1978年生）、三輪町子（女性、1944年生）、吉田幸子（女性、1932年生）、西浜律子（女性、1935年生）への聞き取り調査では、移民の先駆者といわれる工野儀兵衛は貧しくて「移民」に行ったのではなく、自分の意志で行ったのだと話された。また、アメリカ合衆国へ移民をした吉田の父も、「移民」ではなく「働きに行った」のであると証言された。

[13] 日本移民学会編『日本人と海外移住：移民の歴史・現状・展望』pp.18-19。「通過儀礼」として三尾村の移民送出要因を考察した山田［2000：64］も、渡航費用の必要性から、三尾村では貧困層から移民は出ていないと述べている。そのほか、「海を恐れぬ発展的県民性」を要因に求めるものもある（『和歌山県移民史』や『カナダ移住百年誌』など）。

[14] 飯野［1997］pp.46–47。また、1923（大正12）年の改定により、年間150名まで制限される（『美浜町史』下巻、p.979）。

[15] 『和歌山県移民史』p.180。ただし、当時二重国籍者も多くいた点には注意したい。福武［1953：7］がまとめた三尾村の人口推移によると、1940（昭和15）年の国勢調査が1,458人の常住人口を記録している。三尾村の戦前から終戦後にかけての人口は、1,500人前後である。

[16] 同政策については、飯野［1997］が詳しい。カナダの強制移動・収容・送還の政策により、日本に帰国した日系カナダ人については、岡本［2008］、飯野、高村、原口編［2016］、Kobayashi［2018］が、統計調査をもとに移動の実態を明らかにしている。

[17] 福武［1953］p.31。1946年6月、第1次引揚船で45名、22年1月までに380名の引揚者を、計5回の船便でむかえたという（『美浜町史』下巻、p.334）。福武［1953：31］、『美浜町史』ともに、この425名という数字が何を根拠として算出された数字か明らかでない。

[18] 牧畜、林業、鉱業や果樹栽培を主とする農業の中心地である（山下脩二『日本大百科全書』「カムループス」の項より）。

[19] 中野への聞き取り調査（2021年2月1日）より。

[20] 中野への聞き取り調査（2021年2月1日）より。

[21] 「帰加2世」が、学齢期に日本で教育を受けていた事例などが当てはまる。

[22] 福武［1953］p.31。

[23] 福武［1953］p.464。

[24] 三輪本人は幼少期のことをはっきり覚えていないが、満州で生まれ、家族と引き揚げたということは父母から聞いた。

[25] 小山のシベリアでの抑留体験はその後新聞や雑誌で体験談が語られているが、小山の息子、小山祐一は、父がシベリアでの体験をあまり語りたがらなかったと回想する（2021年6月19日、小山茂春資料館訪問時の小山祐一の言葉）。

[26] しかし、満州からブラジルへの「移動」は、戦後引揚者にとって、必ずしも肯定的に捉えられたわけではない。安岡［2014：302–306］は、満州引揚農民や樺太引揚農民が、敗戦直後の引揚経験から、「二度と海は越えまい」と、戦後の海外移住政策を受容しなかった事例を指摘している。

[27] 『美浜町史』（上巻）、pp.525–527。

[28] 中野幸への聞き取り調査（2021年2月1日）、吉田幸子への聞き取り調査（2021年5月25日、6月17日、7月29日）、西浜千鶴子への聞き取り調査（2021年6月13日）、錦濱文子への聞き取り調査（2021年8月2日）、寺下節子への聞き取り調査（2021年8月23日）より。

[29] 西浜千鶴子への聞き取り調査（2021年6月13日）より。

[30] 海外不在地主の問題は『カナダ移住百年誌』（p.46-47）、『美浜町史』（下巻、pp.344-345）福武［1953：31、221-224］、岡本［2008：53］でも指摘されている。

[31] 錦濱文子への聞き取り調査（2021年8月2日）より。

[32] 海外不在地主問題については安岡（2014）第5章を参照。

[33] 福武［1953］p.38。うち、94名がカナダへ、残り10名は北米（アメリカと推測される）へ渡航した。

[34]『カナダ移住百年誌』p.50。

[35] 1949年に、三尾の漁業再興と引揚者救済のために、錦濱を中心として、紀伊水産株式会社が設立された。巾着網漁を操業したが、資金繰りに苦労し、1952年ごろ倒産した（錦濱『思い出の記』2号、pp.1-4、『思い出の記』4号、pp.6-11より）。

[36]『カナダ移住百年誌』p.202。

[37]『思い出の記』4号（1977年）、p.21。

[38]『思い出の記』4号（1977年）、p.4。

[39]『美浜町史』（下巻）、pp.344-345。

[40]『カナダ移住百年誌』p.202。

[41]『占領軍調達史』p.44。

[42] それまでは軍の口頭命令が大部分であった（『占領軍調達史』p.61より）。

[43]『占領軍調達史』p.45。

[44] NHK「戦争花嫁たちのアメリカ」。

[45] 福武［1953］pp.62-66。

[46] 終戦後、カナダから引き揚げた後の日本での生活のことを指す。

[47] 山田［2000］p.132。

[48] 進駐軍兵士には「黒人」もいたが、筆者による聞き取り調査では、語り手の多くが、「進駐軍＝白人」と捉えており、「白人との結婚」や「白人のところへ行く（白人と結婚することや白人家庭でメイドをすること）」という表現がみられたことから、白人と表記する。ただし、占領者のなかでも白人／黒人という人種差別が存在していたことについては、慎重に検討しなければならない。

[49] 1950年三尾村生まれで、三尾で美容室を営んでおられる。中野の祖父母の世代からカナダ移民を多く送出しており、現在でもカナダやアメリカにいる親戚と交流がある。中野の祖父、上山由太郎は、カナダで上山農園を経営し、終戦後、1946年に後述する吉田昭子らと引き揚げている（図3）。幼少期から祖母とよく話をしたり、村の人々が多く集まる家で育ったこともあり、「昔の話」をよく記憶されている。中野には、2020年11月8日、2021年2月1日、2021年8月16日、2021年10月25日の計4回、聞き取り調査を行った。

[50] 女性の主な職業として、理容業、女中、裁縫（とくに洋裁）、役場、学校、郵便局などが挙げられている。

[51] 西川［2010］、西川［2017］。

[52] 坂井、玉城［2012］p.129。

[53] 岡本［2008］p.52。水藪幸治（2004年当時76歳）は、1946年日本に引き揚げてから、沖縄の進駐軍の通訳として働いた。年俸額は3,900ドル（1,404,000円）と、経済的には恵まれていたという。

[54] 和子のように、親戚の冨久枝がメイドに行くので、自分も行きたいと、就労に至ったケースもある（中野への聞き取り調査、2021年2月1日より）。

[55] 和歌山県庁渉外課『連国使用人（人事）』（1949年～1951年）で、1名の女性がハウスメイドとしてキャンプ大阪やショーン少佐宅で雇用された履歴書が記録として残っているほか、ハウスメイドの職歴を表したものが数件確認できたが、詳細な就労経緯や労働実態については明らかにならなかった。

[56] 吉田への聞き取り調査（2021年6月17日）より。

[57] 中野への聞き取り調査（2021年8月16日）より。

[58] 中野への聞き取り調査（2021年2月1日、8月16日）より。

[59] 中野への聞き取り調査（2021年10月25日）より。

[60] 冨久枝の書簡（2021年11月3日）より。

[61] 浜寺ハウスについては、松本［2016］と『大林組80年史』に詳しい。

[62] 中野幸への聞き取り調査（2021年2月1日、8月16日）より。

[63] 西浜千鶴子への聞き取り調査（2021年6月22日）より。

[64] 吉田幸子への聞き取り調査（2021年6月17日、7月29日）より。

[65] 吉田幸子への聞き取り調査（2021年7月29日）より。

[66]「職業案内」（1950年8月1日）、「職はほしいが女中、作男はいや：安定所にみる求職状況」（1950年7月29日）より。

[67] 民俗学の文脈で、宮本常一『忘れられた日本人』（2018年（初出1984年）岩波書店）が、おんなが「都会の」言葉遣いの習得や「世間を広める」ためにも、下女奉公で行儀見習をすることが重要であったと述べている（p.122）ように、「女中奉公」の文化が根付いていたことが分かる。

[68] 今井八重子らによって、1954年に結成された希交会の機関誌であり、1954年から1972年まで、計102号発行された。「女中」だけでなく、幅広い層の女性たちの投書、作文、手記、詩が本誌に寄せられており、彼女らの戦後社会に対する価値観などが読み取れる。

[69] 岡田温子「メイドさんとの座談会に出席して」pp.24-25（阪本編2017『高度成長期の〈女中〉サークル誌：希公会「あさつゆ」』3巻、pp.104-105に収録されている）。

[70] 坂井、玉城［2012：143］が指摘しているように、立川基地で働くハウスメイドに対して、半強制的に性感染症の検診が行われた。米国人家庭で働くメイドのなかに感染者がおり、子供の世話や食事をつくることで、子供に害を及ぼした実例があったため、米人家庭の主婦からの要請があって検査がはじまったという。全駐留軍労働組合が、米軍の担当者に改善を申し入れたが、検診は継続され、第15回国会衆議院外務委員会（1953年2月28日、3月11日）で、福田昌子議員による国会での議論へと発展した。現代の研究では、この福田議員の国会での発言について、売春婦ではない女子の労務者に対して検診を行なうことが、日本の女性に対する人権侵害だと述べていることが、売春婦への差別であると批判しているものもある［茶園2014：67-75］。メイドに対する検診の実態については不明な点も多いが、戦勝国の男と「接触」する彼女たちへの、偏見に満ちた世間のまなざしとそれが制度に組み込まれるという複雑さを内包している。

[71] 西川［2017］pp.23-24。

[72] 中野への聞き取り調査（2021年8月16日）より。

[73] 中野への聞き取り調査（2021年8月16日）より。

[74] 吉田への聞き取り調査（2021年5月25日、6月17日、7月29日）より。

[75] 山田［2000］pp.253-255。

[76] 中津フデもその一人である。「アメリカ村の看板婆さん」という愛称で親しまれ、現在でもフデさんをモデルにした研究がされている。

[77] 調査対象者は、トロント在住65名、スティブストン57名の三尾にルーツをもつ移民3世、計122名である。年齢は、17歳から62歳で、平均年齢は35.5歳。3世への調査は、107項目からなる質問票への回答を中心に行われた。1990年、1994年の三尾でのフィールド調査と、1995年、1996年、1998年のバンクーバーでのフィールド調査による。

[78] 山田［2000：173-174］は、他県出身者との結婚は親に反対されることが多く、三尾村出身者か、せめて和歌山県出身者との結婚がよしとされたと述べている。

[79] 山田［2000］p.209。

[80] 中野への聞き取り調査（2021年2月1日、8月16日）より。

[81] 冨久枝は三尾村で生まれ、生後2か月で渡加、昭子はカナダ生まれカナダ育ちである（中野への聞き取り調査、2021年10月25日より）。

[82] 中野への聞き取り調査（2021年2月1日）より。

[83] 西川［2017：240-241］も、「同じ職場で日本人男性、女性と米国人男性、女性が働いたのだから、恋愛関係や国際結婚の成立があった」と指摘している。

[84] 田村恵子「戦争花嫁」の項より参照（吉原和男、蘭、伊豫谷、塩原、関根、山下、吉原直樹編『人の移動事典：日本からアジアへ・アジアから日本へ』p.72）。

[85]「戦争花嫁」といっても、アメリカ、ハワイ、オーストラリアなど、結婚相手の出身国によって、渡航先が異なり、結婚前後の経験にも違いがみられる。本論文では、アメリカ大陸を中心とした三尾村移民と「戦争花嫁」について検討することから、断りがない限り、米国へ渡った人々を「戦争花嫁」とする。また、前提として本論文では「日本人戦争花嫁」のみを扱う。

[86] 冨久枝の書簡（2021年11月3日）より。

[87] 田村［2013］は、占領軍労働がカップルの「出会い」の場となったと指摘しているが、具体的にどのような就労経緯で彼ら／彼女らがその場に集い、どのような人々のいかなる経験があったのかまでは明らかになっていない。

[88] 冨久枝の書簡（2021年11月3日）より。

[89] 冨久枝の書簡（2021年11月3日）より。

[90] たとえば、1934年サイパン島生まれのミサコ・ゴーディーは、1944年のサイパン島での日本軍玉砕後、米軍占領下でキャンプに収容され、1946年4月に沖縄に引き揚げた。キャンプ・ハンセンの洗濯部で勤めていたときに、夫と出会った［江成1981：225-228］。1936年台湾生まれの中村良子も、日本の敗戦により、台湾から引き揚げ、その後横須賀のバーで働いていたときに、アメリカ人の夫と出会った［林、田村、高津2002：74-76］。

[91] 中野への聞き取り調査（2021年8月16日）より。

[92] 茶園［2014：192-193］によると、キャッチ（「パンパン」とみなされたおんなたちの取り締まり）されたおんなたちの物質的な豊かさにめぐまれた「華やかな装い」は、占領者のためのものであり、キャッチされたおんなたちを視姦する野次馬のおとこたちのためのものではないという表象でもあった。

[93] ウォント盛［2017］、p.4。

[94] 2名の女性は、『エミーよ：愛の遺書』（1954年、日本織物出版社）と『エミーよ、その後』（1957年、東京ライフ社）の著者である金子和代と、母が「パンパン」であり、アフリカ系アメリカ人兵士と結婚したYumi Wilson（サンフランシスコ州立大学ジャーナリズム学教授）である。

[95] ウォント盛［2017］、p.9。

[96] しかし、本論文を通して明らかになった「パンパン」との混同を避ける語りは、「パンパン」や娼婦への差別を内包している。

[97] ブレア照子「赤道をはさんで」植木武2002『「戦争花嫁」50年を語る：草の根の親善大使』、p.148。